

2022年度 3月修了 修士論文

ベルギーの指導者養成と選手の個性を磨き  
続けるサッカー指導法に関する研究  
-今後の日本サッカーへの提言を踏まえて-

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 コーチング科学研究領域

5021A047-7

森田 省吾

研究指導教員： 倉石 平 教授

## 目次

I . 緒言 . . . . .	1
第 1 節 ベルギーについて	
1. ベルギーの歴史的背景	
2. サッカーベルギー代表の国際大会	
3. FIFA ランキング	
第 2 節 育成プログラム	
1. 背景	
2. オランダ式・フランス式・ドイツ式の融合	
3. スカウティングシステムの完備	
4. エリートスクールの設立	
5. 移民系プレイヤーの台頭	
第 3 節 先行研究	
第 4 節 研究意義	
第 5 節 研究目的	
II . 研究方法 . . . . .	23
1. 文献調査	
2. 動画視聴	
III . 結果・考察 . . . . .	24
第 1 章 指導者養成	
第 1 節 Belgium Football DNA	
第 2 節 コーチング方法の転換	

- 第 3 節 コーチングをするにあたって
- 第 2 章 選手の個性を磨き続ける指導法
  - 第 1 節 バイオ・バンディング
    - 1. 概要
    - 2. バイオ・バンディングがもたらす影響
      - (1) トレーニングの観点
      - (2) 競争の観点
      - (3) タレント発掘の観点
    - 3. バイオ・バンディングの測定方法
      - (1) Predicted Adult Height (PAH)
      - (2) Peak Height Velocity (PHV)
    - 4. ベルギーにおけるバイオ・バンディング
  - 第 2 節 ゲーム形式を中心とした練習
    - 1. 認知・判断・実行のプロセス
    - 2. ゲーム形式の練習をする際の指導法
    - 3. 他国における認知から判断の重要性
  - 第 3 節 国外クラブへの積極的な移籍
    - 1. 他国リーグへのステップアップ
    - 2. 育成を重要視した移籍金ビジネス
  - 第 4 節 ベルギーにおけるサッカーの普及
    - 1. 7~9 歳への指導による普及
    - 2. ベルギーサッカーのトリプルミッション
      - (1) 「普及」からのアプローチ
      - (2) 「資金」からのアプローチ
      - (3) 「勝利」を目指すトリプルミッション

### 第3章 日本サッカー界への提言

#### 第1節 日本サッカー界の強化構想

##### 1. 三位一体の強化策

##### 2. JFAの宣言と目標

#### 第2節 日本サッカーの課題点

#### 第3節 具体的な提言

##### 1. バイオ・バンディング

##### 2. ゲーム形式を中心とした練習

IV. 結論	75
--------	----

V. 研究の限界	77
----------	----

VI. 参考文献	78
----------	----

付録

謝辞

## I. 緒言

### 第 1 節 ベルギーについて

#### 1. ベルギーの歴史的背景

ベルギーは図 1 のように西ヨーロッパに位置し、ブリュッセルを首都とする国である。ブリュッセルには欧州連合の主要機関が多く置かれていることから、「EU の首都」と呼ばれている。面積は 30,528 平方キロメートルで日本の約 12 分の 1、人口は 1,149.3 万人<sup>63)</sup>と面積・人口共に日本よりも小規模である。また、オランダ語・フランス語・ドイツ語の 3 種類を公用語としている。



図 1 ベルギーの地理的位置

出典：<https://allaboutbelgium.com/general-information/>

また、国内においては、図 2 のように主にオランダ語を話す北部のフランデレン地域、フランス語を話すワロン地域、両方が混合しているブリュッセル首都圏地域の 3 つに分かれている、連邦制の国である。

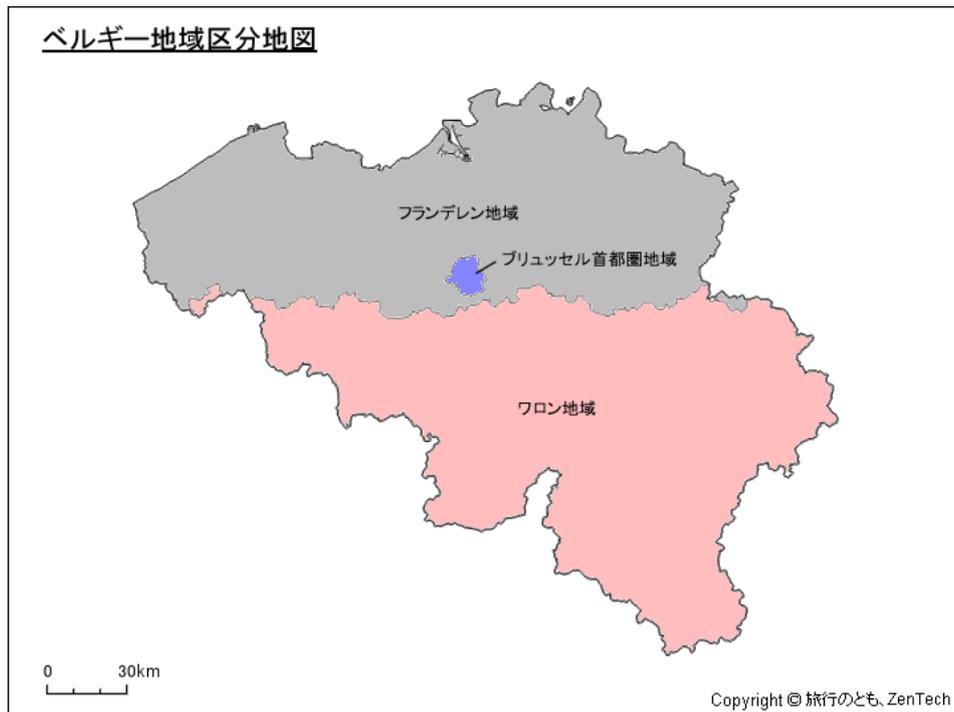


図 2 ベルギーの地域区分

出典：[https://www.travel-zentech.jp/world/map/Belgium/Region\\_Map\\_of\\_Belgium.htm](https://www.travel-zentech.jp/world/map/Belgium/Region_Map_of_Belgium.htm)

## 2. サッカーベルギー代表の国際大会

サッカーベルギー代表は 1980 年代に第 1 次黄金期を迎えた。1982 年にスペインで開催されたサッカー界において最も権威のある大会である FIFA ワールドカップ（以下、W 杯）では、開幕戦でディフェンディングチャンピオンであるアルゼンチンを倒して世界を驚かせた後、次の大会の 1986 年にメキシコで開催された W 杯でこれまでの同国最高成績である 4 位という成績を収めた。これ以来、ベルギー代表は W 杯出場の常連国として名を轟かせたのである。しかし、2002 年に日韓共同で開催された W 杯への出場を最後に国際大会である W 杯と UEFA 欧州選手権の合計 5 大会連続で予選を敗退してしまい、本大会にも出場すらできないという暗黒期を迎える。

しかし、2010 年頃からわずか 5 年という短期間でナショナルチームの世界ランキングである FIFA ランキングを急激に上げてきたことに伴い、W 杯における成績も向上してきた。表 1 のように 2014 年にブラジルで開催された W 杯ではベスト 8、その次の大会の 2018 年にロシアで開催された W 杯ではそれまでの同国最高成績である 4 位を上回る 3 位という史上最高成績を残した。このように、直近 10 年でサッカーベルギー代表は世界有数の強豪国の仲間入りを果たすことに成功し、国際大会でも結果を残したことで第 2 次黄金期を迎えた。

表 1 2002 年以降のベルギー A 代表の国際大会の成績

大会名	開催年	成績
W杯	2002	ベスト16
	2006	予選敗退
	2010	予選敗退
	2014	ベスト8
	2018	3位
UEFA欧州選手権	2004	予選敗退
	2008	予選敗退
	2012	予選敗退
	2016	ベスト8
	2021	ベスト8

次に，アンダー世代に目を向けてみる．アンダー世代においては，23 歳以下の選手たちで開催されるオリンピックと 21 歳以下の選手たちで開催される UEFAU21 欧州選手権の 2 つがアンダー世代における主要な国際大会である．しかし，目立った成績は表 2 のようにオリンピックにおける 2008 年大会で収めた 4 位の 1 大会と UEFA U21 欧州選手権における 2007 年大会で収めた 4 位の 1 大会だけである．これら以外では本大会に出場できずに予選で敗退することがほとんどであるため，アンダー世代での国際大会は決して優秀とは言えない．

表 2 アンダー世代の国際大会での成績

大会名	年度	成績
オリンピック	2000	予選敗退
	2004	予選敗退
	2008	4位
	2012	予選敗退
	2016	予選敗退
	2021	予選敗退
UEFAU21欧州選手権	2000	予選敗退
	2002	グループリーグ敗退
	2004. 2006	予選敗退
	2007	4位
	2009.2011	
	2013. 2015	予選敗退
	2017	
	2019	グループリーグ敗退
2021	予選敗退	

### 3. FIFA ランキング

ベルギー代表は直近 10 年で世界の強豪国としての仲間入りを果たすことに成功した。サッカーのナショナルチームの世界ランキングである FIFA ランキングにおいて、図 3 のように 2010 年には同国 2 番目に低い数字である 68 位だったのにも関わらず、5 年後の 2015 年には 1 位にまで登りつめた。FIFA ランキング 1 位になったのは史上 8 カ国目である。

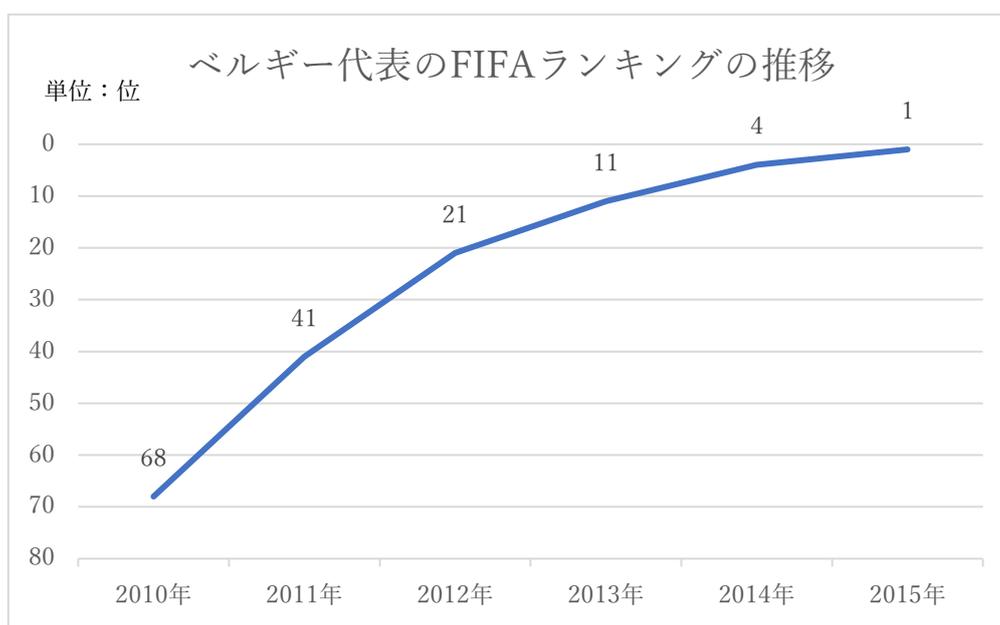


図 3 ベルギー代表の FIFA ランキングの推移

出典：FIFA 公式サイトより,筆者作成

FIFA ランキングの求め方は、①試合の重要度、②試合結果、③試合の期待結果の 3 つの要素を必要とし、ポイントが以下の計算式で導かれる<sup>12)</sup>。

加算 or 減算ポイント = (1) 試合の重要度 × ((2) 試合結果 - (3) 試合の期待結果)

(1) 試合の重要度, (2) 試合結果, (3) 試合の期待結果の具体的な内容は以下の表 3, 4, 5 の通りである.

表 3 試合の重要度

ポイント数	条件
60P	W杯本大会の準々決勝、準決勝、3位決定戦、決勝
50P	W杯本大会の準々決勝以前の全試合
40P	各大陸選手権本大会の準々決勝、準決勝、3位決定戦、決勝
35P	各大陸選手権本大会の準々決勝以前の全試合
25P	各大陸選手権予選とW杯各大陸予選など
15P	各ネーションズリーグのグループステージ
10P	国際Aマッチデーの親善試合
5P	国際Aマッチデー以外の親善試合

表 4 試合結果

ポイント数	結果
1P	勝ち
0.75P	ペナルティーキック戦での勝ち
0.5P	引き分け・ペナルティーキック戦での敗戦
0P	負け

表 5 試合の期待結果

試合の期待結果 =  $1 \div (10^X + 1)$

※  $10^X$  = 累乗 =  $(10 \div 600)$

※  $X$  = (相手チームの試合前のポイント) - (自チームの試合前のポイント)

## 第 2 節 育成プログラム

### 1. 背景

直近 10 年で驚愕の進化を遂げてきたベルギー代表であるが、その背景にはベルギーサッカー協会（以下、RBFA）が主導で構築した育成プログラムが存在する。この育成プログラムを構築するきっかけは 2000 年にベルギーとオランダの共同開催となったヨーロッパで No.1 を決める大会である UEFA 欧州選手権における敗退である<sup>12)</sup>。この大会は 1960 年から開催されている歴史のある大会であり、ベルギー代表は 2000 年大会では地元開催として迎えることになった。しかし、彼らは同大会において史上初、グループリーグで敗退した開催国という屈辱を受けることになった。この事実を突きつけられたことで、ベルギー国内においても現状に対して危機感を抱いた。その結果、国全体で再度ベルギーサッカー界を盛り上げようとする意識がベルギー全体に浸透するようになり、これまで国内で対立していた民族も 1 つにまとまるようになった。同大会で敗退したことで全てが無駄に終わった訳ではなく、開催国として得た収益をもとに、育成のためのインフラ設備を整えることができた<sup>12)</sup>。それを基に RBFA のテクニカルディレクターであるミシェル・サブロン氏が 2006 年に RBFA 主導の育成プログラムを立ち上げた<sup>58)</sup>。育成プログラムの内容は表 6 の通りである<sup>4)16)48)58)70)</sup>。

表 6 育成プログラムの内容

項目	説明
フォーメーションの統一	オランダ式に習って4-3-3に統一する
長所徹底育成主義	フランスのように個人の特性に着目して強みを伸ばす
判断能力の重視	ドイツ的な要素である判断力を重要視する
指導者養成	指導者を養成して各クラブに派遣する
スカウティングシステムの完備	ユースアカデミーの運営を査定するシステム
エリートスクールの設立	国内8カ所にトレーニングセンターを設立する
移民系プレイヤーの台頭	ヨーロッパの中で最も早くアフリカ系選手を登用する

ミシェル・サブロン氏は結果を出せない代表の課題について熟考した。この育成プログラムが構築される前の当時の強化プログラムは質が低く、将来に期待を持てるものではなかったため、ほぼ全てを変える必要があった<sup>4)</sup>。そこで、彼はオランダ、フランス、ドイツといった近隣諸国の代表や、アヤックスやバルセロナなど育成に定評のあるクラブを視察して回り、メソッドを学んだ<sup>7)</sup>。加えて、同国サッカーを根底から覆すために、数万時間におよぶユース世代の試合を研究してどこに問題があるのかを突き止める作業や、ユース世代の試合の1000試合以上を撮影することで詳細な部分まで徹底的に目を通す作業を施した<sup>4)</sup>。しかし、完成させた指示書を各クラブやサッカースクールに持っていった際には猛反発を受けた<sup>58)</sup>。これまでの方針通りに指導したいという指導者が多かったが、彼らを説得して指示書通りのトレーニングを依頼した。メディアからも批判を受けたが、3年、4年と経ち、周辺国との対外試合などで目に見えて結果が表れ出すと、次第に反発も消えていった<sup>7)</sup>。全てのクラブがこの指示書

を受け入れたわけではないが、受け入れた先ではロメル・ルカク  
やケビン・デブライネが才能を開花させ、世界的な名プレイヤー  
へと成長した<sup>4)</sup>。

## 2. オランダ式・フランス式・ドイツ式の融合

この育成プログラムに関して、現在のベルギーにおける指導法の基底となっているのは「オランダ式とフランス式とドイツ式の融合」である<sup>16)</sup>。オランダ式はチーム全体のシステムについての指導、フランス式とドイツ式は個人に着目した指導である。ベルギーの地理的背景として、面積・人口共に周辺の国と比較しても小規模である。加えて、ベルギー国内の3つの地域それぞれが自治権を所有していることから、言語が異なるため対立しやすく1つの国という意識が弱い<sup>58)</sup>。そこで、この事実をベルギーの多様性であると肯定的に強みとして捉えた。そして、ベルギー国内においてはオランダ語圏・フランス語圏・ドイツ語圏が存在し、それぞれの国との親交も深かったため、オランダとフランスとドイツの力を借りることにした。この3カ国ともサッカー強豪国であるため、模範する対象としては絶好である。まず、オランダにおいては、図4のようにディフェンダーが4人、ミッドフィルダーが3人、フォワードが3人でウインガーをサイドに配置する4-3-3のフォーメーションを伝統的に採用している。ベルギー代表もこのフォーメーションを採用し、ユース世代から統一して一貫したシステムを共有することで国全体が目指すべきフットボール像を明確にするという狙いがある<sup>48)</sup>。次に、フランス式に関しては、個人の特性に着目し、パスよりもドリブルを教えることを優先する<sup>16)</sup>。個人をベースとして長所と短所を明確に見分けることで、様々な個性をさらに伸ばすことを重要視している<sup>48)</sup>。そして、最後にドイツ的な要素である「判断能力」もプログラム内容に含めている<sup>71)</sup>。

このように、ベルギーでは隣接している周辺の国の育成法を参考にしたことで、根底からベルギーにおけるサッカーの指導方針を変更させた。したがって、ベルギーは、オランダの一貫したシステムの共有をベースにししながら、個人の特性に着目したフランス式と判断能力を重要視するドイツ式のアプローチを融合した育成方法を採用したのである。

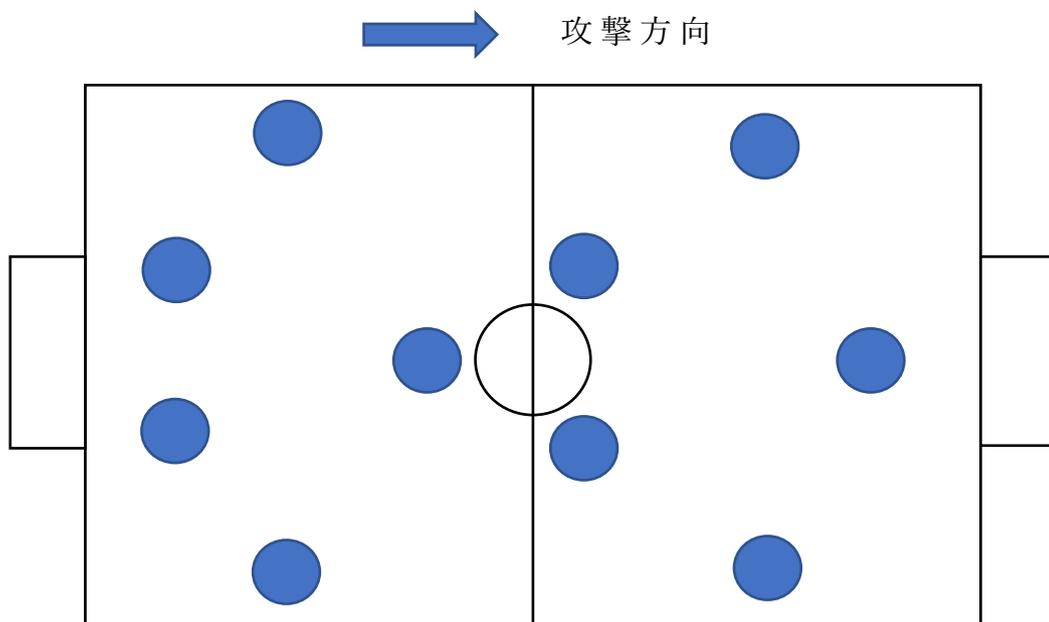


図 4 4-3-3-のフォーメーション

### 3. スカウティングシステムの完備

ベルギーの「ダブルパス」社はこれまでのサッカー界には存在しなかったマネジメントシステムを開発した。それは「フットパス」と呼ばれるマネジメントシステムで、外部の第三者機関である「ダブルパス」社が各クラブから提出された資料の検証と訪問してのヒアリング、そして練習や試合の分析を通じてクラブの育成組織を評価する<sup>24)</sup>。3年単位でクラブの「フィロソフィー」や「カリキュラム」、「メソッド」、「ミーティング」、「選手評価」、「情報共有」などのおよそ400項目を5000点満点で評価し<sup>3)</sup>、育成に関するあらゆる項目を数値化することで客観的に分かるようにする。加えて、練習場だけでなく、試合にも足を運んで監督がハーフタイムに何を伝えるかまでをもチェックするのが特徴である<sup>24)48)</sup>。このシステムはドイツのブンデスリーガへの導入を皮切りに顧客にはイングランドのプレミアリーグ、アメリカのMLS、ハンガリーリーグ、デンマークリーグ、2015年にはJリーグへの導入も決まった<sup>25)</sup>。ベルギー国内では、プロとアマを含め、600クラブがダブルパス社のマネジメントを受けている<sup>48)</sup>。第三者機関からの監査により、客観的に分かるだけでなく、人事面などのデリケートな部分のデータも提供することができる<sup>24)</sup>。ここに第三者機関による監査の意味合いが見出せる。このシステムの目的は決してクラブを格付けすることではない。課題点や問題点を抽出かつ共有することで、一緒に改善していくことが目的である<sup>25)</sup>。

さらに、フットパスには大きな狙いがある。それは、人が変わっても残る指導法や全体の方針、選手の評価基準などの財産を

言語化やシステム化することでクラブに持ってもらうことである<sup>24)</sup>。中学・高校は同じ指導者が10年、15年と長期間指導することが多いが、プロの場合は3年も経たないうちに新しいコーチを招聘したり、1シーズンの間に監督が解任されたりと短期間で指導者が変わることが多い。そのため、前任者が退任すればそれまでのやり方が変更されたり、積み上げてきたものが残されていないというケースが起こる可能性が高い<sup>24)</sup>。

したがって、フットパスを導入することで、それまでチームが積み上げてきた財産を無駄にすることがない。そして、チームの育成の現状を可視化し、フィードバックを踏まえながらこれからの選手育成をより良くすることが可能である。このように、ベルギー独自に開発したマネジメントシステムであるフットパスはサッカー界に多大な影響力を及ぼし、新たな革命を巻き起こしたのである。

#### 4. エリートスクールの設立

育成プログラムの1つにエリートスクールの設立がある。図5のようにベルギー北部のフランデレン地域に5カ所、南部のワロン地域に3カ所の合計8カ所の「Topsport」と呼ばれるエリートスクールを設立した<sup>6)</sup>。全国8カ所に設置された同施設では、地方リーグや下部クラブの育成所→エリートクラブの育成所、この順にセレクションを経て選出された毎年およそ300人がトレーニングに励んでいる<sup>58)</sup>。スケジュールは、平日は朝8時半～10時に授業、それから昼まで練習、午後の授業の受けた後夕方からまた練習という流れで、土曜日は試合を行う<sup>58)</sup>。このエリートスクールはいわゆる「チーム」ではないため、徹底してドリブル・パス・シュートなどの個人のための練習に時間を割くことができる<sup>46)</sup>。また、練習環境も非常に充実しており、コーチにはこれまで選手やコーチとして活躍されている方やUEFA-Aや教育学の資格を取得している方が在籍している<sup>6)</sup>。加えて、ナショナルAチームと一緒にトレーニングを行うことができたり、スクール生は自動的にユース代表の候補に挙げられたりと将来を見据えた環境に囲まれて過ごすことが可能である<sup>6)</sup>。2012年～2013年にかけてのTopsportに在籍する北部のフランデレン地域と南部のワロン地域それぞれの生徒数、コーチ数、ゴールキーパーのコーチ数は表7の通りで合計337人の生徒が所属している。

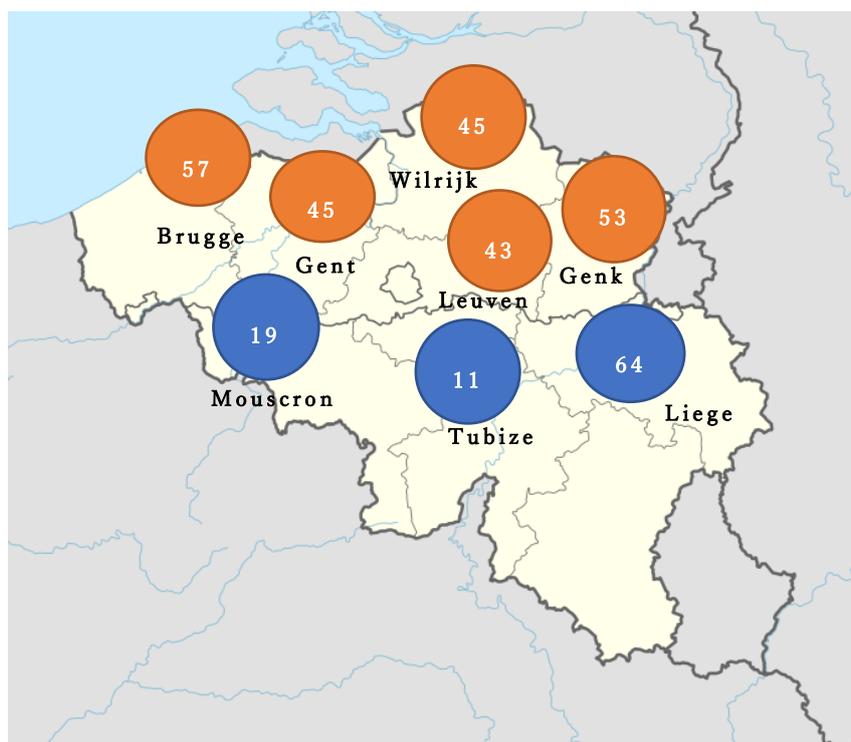


図 5 ベルギー国内 8 カ所の Topsport の地図(2012-2013)<sup>1</sup>

出典：File:Belgium adm location map.svg - Wikimedia Commons

表 7 Topsport の地域別概要

	フランドレン地域	ワロン地域
生徒数	243	94
コーチ数	15	6
GKコーチ数	5	3

<sup>1</sup> オレンジ色が北部のフランドレン地域，青色が南部のワロン地域

数字はその地域の生徒数

## 5. 移民系プレイヤーの台頭

育成プログラムの中の 1 つである移民系プレイヤーの台頭もベルギーサッカーの大きな躍進に影響をもたらした。ベルギーの首都であるブリュッセルやアントワープなどの都市部には移民としてベルギーに来た人々の子どもが大勢いる。ベルギーは土地柄多くの国と隣接しており交通の要衝として知られているため、様々な国籍の人々がベルギーを往来することが日常茶飯事である。そのため、ベルギー人は日頃からの多国籍の人々とのコミュニケーションを図ることに慣れており、移民の受け入れにも寛容である。

そういった背景もあり、RBFA は様々な人種が混ざり合うことは多様性を生み出すことにも繋がるためベルギー代表にとってプラスに働くと考え、積極的に移民を登用した<sup>58)</sup>。ちなみに、ベルギーリーグはもともとヨーロッパの中で最も早くアフリカの選手を登用していた<sup>57)</sup>。ベルギーに次いだのがフランスで、ドイツやイタリアで黒人選手が台頭するのはさらに後のことである。加えて、ベルギーリーグは他リーグと違って外国人選手の数を制限するルールが存在しないため、移民者にとってベルギーは融合しやすくコミュニケーションが図りやすい土地である。また、移民系プレイヤーが台頭したことは民族間の対立にもプラスの影響をもたらした。以前の代表内は「フラマン vs ワロン」の対立が起きており、チーム内での結束が固まることが困難だった。しかし、移民系プレイヤーが台頭したことで第三者の派閥が生まれ、代表内の「フラマン vs ワロン」の緩和にも役立った<sup>58)</sup>。2018 年にロシアで開催された W 杯のベルギー代表において、表

8のように23名中10名が移民系プレイヤーであった。メンバーのうちおよそ半分を移民者で占めていることから、ベルギーの躍進には移民系プレイヤーの力が欠かせないことが分かる。

表 8 2018 ロシア W 杯のベルギー代表の移民系プレイヤー<sup>2</sup>

クルトワ	ヴィツェル
ミニョレ	シャドリ
カステールス	フェライニ
デンドンケル	トルガン・アザール
ボヤタ	デンベレ
アルデルヴァイレルト	デブライネ
ヴェルトンゲン	メルテンス
コンパニー	バチュアイ
ムニエ	エデン・アザール
ヴェルマーレン	ルカク
カラスコ	ヤヌザイ
ティーレマンス	

<sup>2</sup> オレンジ色に染まっているのが移民系プレイヤー

### 第3節 先行研究

須田ら（2019）は、オランダサッカーの育成システムについて研究した。オランダの選手育成システムはオランダの文化・歴史的背景を反映し、その背景にはストリートサッカーで子供たちが自らサッカーを楽しみ、学ぶことこそが上達への一番の道であるとの共通理解にあると報告している<sup>65)</sup>。

松原を中心としたフランスの育成についての一連の研究（松原ら 2006, 2007, 2009, 2011）<sup>37)38)39)40)</sup>がある。これらの研究ではフランスの育成の現状や育成システムについての報告だけではなく、実際に松原氏がフランスに赴いて得られた知見をまとめ、いわゆるトレーニングセンターである国内に 11カ所に設けられている前育成センターや国立サッカー学院についての記載がされている。

内藤ら（2013）はイングランドのユース育成システムについて研究した。この研究では選手育成のための環境整備を行い、「FA ナショナル・スクール・オブ・エクセレンス」を設立することで、全寮制で質の高いコーチングと教育を施したことなどが報告されている<sup>44)</sup>。

土屋（2015）はドイツ協会が主導で実施した選手育成の大改革について、大改革が成功した要因であるドイツ全土をカバーするトレセンの導入やプロクラブでの育成アカデミー導入などについて報告している<sup>68)</sup>。

このように、育成大国であるフランス、オランダ、ドイツ、イングランドなどベルギー周辺のヨーロッパ各国の育成システムや指導についての先行研究は多く報告されている。

しかし、ベルギーの躍進に関する記事はインターネット上において多く記載されているが、育成プログラムの中に含まれている「指導者養成」に関しては先行研究どころか記事やインターネット上にも詳細が載っていない。加えて、フランス式である選手の個性を磨き続けるサッカー指導法の具体的な中身についても明らかになっていない。

#### 第4節 研究意義

サッカーベルギー代表がここまで大きく飛躍した前例が存在しないため、インターネットや記事には多く記載されている。しかし、驚愕的な躍進を遂げてから10年も経過しておらず間もないため、先行研究として報告されている事例がなく研究をする余地がある。また、躍進の理由としてRBFA主導の育成プログラムであることは判明しているが、その中身は「スカウティングシステムの完備」「エリートスクールの設立」「移民系プレイヤーの台頭」など日本サッカー界も既に導入していたり、地理的・歴史的背景が伴うため参考にしづらい部分がある。しかし、「指導者養成」「選手の個性を磨き続ける指導法」は日本サッカー界も参考にしやすいと考えられる。「指導者養成」はJFAが定めている三位一体の政策に通ずる部分があることに加え、JFAの選手育成のコンセプトの1つに「目先のその時々勝利ではなく、1人の選手が自立期においていかに大きく成長するのかを第一の目的とする<sup>55)</sup>」と明記されていることから、現在の日本サッカーは指導者養成や個の育成に注力していることが伺える。

したがって、実際に指導者養成や選手の個性を磨き続ける指

導法に取り組んだことで見事に育成を成功させたベルギーの指導法を研究し、その研究結果を日本サッカー界に還元することで、これからのサッカー指導法の一助となるため本研究は意義深いといえる。

## 第5節 研究目的

本研究はベルギーの指導者養成に関する研究を行い、選手の個性を磨き続けるサッカー指導法の実態を明らかにすることを目的とする。加えて、研究結果を踏まえた上で今後の日本サッカーへの提言を検討する。

## II. 研究方法

### 1. 文献調査

本研究ではインターネット，記事などを活用してサッカーベルギー代表の躍進に関する情報を収集する．

### 2. 動画視聴

複数の公式スポーツ団体が動画共有サービスである YouTube に投稿している複数の動画を視聴して情報を収集する．

新型コロナウイルスの蔓延により，ヨーロッパでは 2020 年と 2021 年においては制限の大きい外出規制が施された．その影響で試合の実施が中断されるなどヨーロッパサッカー界全体が停滞していた．そこで，指導現場に直接携わることができない指導者のために，各国のサッカー協会はオンライン上でウェビナーを多く実施した．そうすることで，自宅に滞在している際においても，多くの学びを吸収させることが可能である．本研究では，現在，ベルギーサッカー協会の指導者養成責任者であるクリス・ファンデル・ハーゲン氏（以下，クリス氏）がベルギーにおける育成についてプレゼンテーションしていた複数のウェビナーを視聴し，英語を全て日本語に訳してまとめた<sup>10)14)19)20)22)</sup>．

### Ⅲ. 結果・考察

#### 第1章 指導者養成

##### 第1節 Belgium Football DNA

先程も述べたが、元々、RBFA の元テクニカルディレクターであったミシェル・サブロン氏が育成プログラムを構築させた。これを構築する上で、RBFA は Belgium Football DNA を指導者に教え込んで指導者養成に取り組み、このプロジェクトは《The Belgian Way》と呼ばれている。Belgium Football DNA は以下の表9のように全部で5つの内容で構成されている。

表 9 Belgium Football DNA

項目	内容
How we are	レベルによって変化するが、クラブ/自分の存在意義
How we play	プレー哲学
How we identify and develop talent	タレント発掘・育成の哲学からの未来の選手像
How we coach	コーチング哲学
How we support our players	選手の身体的、心理的サポート

これらの内容は構築された当初から大きな原理や原則は何も変化しておらず、変化しているのは時代に沿った技術や戦術の内容だけである。どのようにして選手やチーム、試合に大きなインパクトを与えるべきか悩んだ末、指導者養成に取り組むことを決断した。その理由は2つある。1つ目は、コーチは選手の先生となるからである。2つ目は、コーチはこれら選手・チーム・試合の全てにおいてコントロールする役割を担っているからである。

そのため、コーチの力量によって選手・チーム・試合に対する影響力やインパクトが決まるとも言える。

## 第 2 節 コーチング方法の転換

クリス氏は、コーチングには「チーム中心のコーチング」と「個人中心のコーチング」の 2 種類存在することを説明していた。それは以下の表 10 の通りである。

表 10 コーチングの種類

項目	チーム中心のコーチング	個人中心のコーチング
焦点	チーム	プレイヤー
ターゲット	今日のパフォーマンス	未来に向けての今日の向上
文化	チームに適応するためのサバイバル	経験から学ぶ
役割	管理	選手へのサポート
リーダーシップ	トップダウン	ボトムアップ
コーチ	指導コーチ	メンターとしてのコーチ

「チーム中心のコーチング」は、強いチームを創り上げるのが目的であり、試合における良いパフォーマンスや結果についてこだわる。また、チームやチームのコーチであることについて誇りに思うだけでなく結果を求めるため、レベルの高い選手には大きな興味を抱くが試合に大きな印象を残さないレベルの低い選手にはあまり興味を抱かない。

反対に、「個人中心のコーチング」はシーズン終了後に選手が大きな進化を遂げていることが目的であり、レベルの高い選手だけでなく低い選手にも焦点を当ててサポートする。そして、プレイヤー選手の経験をさせることを重要視している。

指導者養成に取り組む以前のベルギーでは育成年代から「結果

最優先主義」であり、チームや試合結果などのチームパフォーマンスに焦点を当てていたため、「チーム中心のコーチング」であった。喩えとして「ベルギー人の指導者は試合中ずっと立って叫んでいるが、オランダ人の指導者はずっと座っており、試合が終わってから相手チームの指導者と試合内容をお互いに冷静に分析していた」と表現されていた<sup>63)</sup>。しかし、改正後は、選手の将来への進化に焦点を当てるようになり、「個人中心のコーチング」をしている。プレイヤーズファーストを掲げ、選手の上達のためになることは全て実践する。結果よりも個の育成を、勝利よりも個人の進化を重要視しているため、U14までは点数表なしで育成に取り組み、選手たちが自由に楽しく学ぶことに重きをおいている。しかし、コーチングメソッドを変更することに伴うコーチのマインドセットを成功させることに5~6年もかかった。意識が変化したのは、コーチたちが選手の変化に気づき、上手く遂行できている実感や個々人が上達すればチームとしてのレベルも向上するという実感から、コーチたちはエゴを捨てられるようになった。コーチングメソッドを根底から変更したことで結果に固執せず、選手に焦点を当てる将来を見据えた選手育成に取り組んでいる。

### 第3節 コーチングをするにあたって

クリス氏は選手と信頼関係を構築することの重要性を説いていた。信頼関係はコーチングにおいて非常に重要である。選手はコーチ・両親・チームメイトのことを信頼していなければ、一貫してパフォーマンスを継続することができない。しかしながら、選手をコーチ色全部に染めても全員が同じ色に染まって機能しないため、選手をリスペクトすべきである。そして、クリス氏は、素晴らしいコーチングを表11のように6つの単語の頭文字をとってPEOPLEと表現していた。

表11 コーチングの極意

単語	意味
<b>P</b> erson-centerd	選手中心
<b>E</b> mpower	力を与える
<b>O</b> rganized	組織された
<b>P</b> ositive	前向き
<b>L</b> earning	学習
<b>E</b> ngaged	携わる

## 第2章 選手の個性を磨き続ける指導法

### 第1節 バイオ・バンディング

#### 1. 概要

グループを分ける際にバイオ・バンディングという方法がある。ベルギーにおいて、バイオ・バンディングを育成法として採用している。従来の方法では図6のように実年齢でグループを分けることで身体的なフィジカルの差が生じることが多いが、バイオ・バンディングとは、図7のように実年齢ではなく生物学的年齢でグループを分ける育成法である<sup>72)</sup>。サイズ・強さ・スキルなどの成熟度の差異に関連する違いを制限することで、トレーニングと競技における平等性が高まり、若いアスリートの怪我のリスクを軽減できる可能性がある<sup>62)</sup>。先行研究において、より生物学的に成熟したアスリートは、筋力、パワー、およびスキルのテストでより優れたパフォーマンスを発揮することが判明している<sup>5)41)</sup>。さらに、サッカーの試合では、成長の早い男性は成熟していない男性に比べて高速でより長い距離を移動し、より高強度のアクションを実行する<sup>7)</sup>。

しかし、これらのパフォーマンスは、成長の早いアスリートが成功する可能性が高い傾向があり、より才能があるという風に間違っ​​て認識されることに繋がる。同じ実年齢のアスリートでも生物学的年齢が異なる場合があるため、強さやスピードなどの身体的資質の違いは非常に大きくなる可能性がある。加えて、一部の若いアスリートの違いは生物学的年齢の数年の違いにまで及び、アスリートの発達とパフォーマンスに影響を与える可能性がある<sup>35)</sup>。そのため、バイオ・バンディングは早熟および遅

熟のアスリートの両方に成長できる最適な環境を作成し、利益をもたらすことができる<sup>62)</sup>。成熟期のアスリートが同様の身体能力を持つ他の選手と競争している環境では、彼らは身体的優勢に頼ることができなくなるため、技術的および戦術的能力の活用や開発することが奨励される。そして、同等またはそれ以上の成熟したプレイヤーと競争しなければならない可能性がある将来の課題に備えることにもなるため、この均等化のアプローチは、身体的および技術的特性を発揮する機会が増える遅咲きのアスリートにも利益をもたらす<sup>62)</sup>。

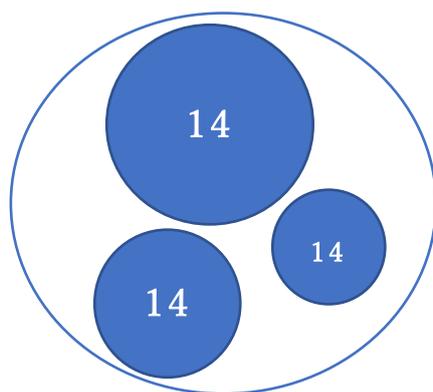


図 6 従来の方法<sup>3</sup>

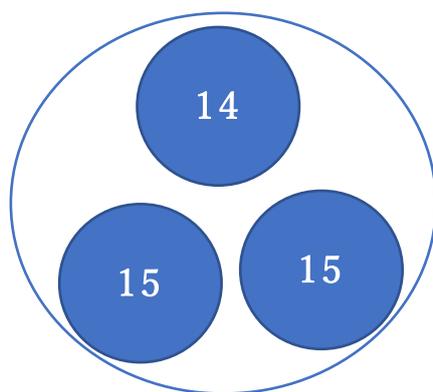


図 7 バイオ・バンディング<sup>3</sup>

---

<sup>3</sup> ○の大きさは身体的な成長の大きさ、数字は年齢

## 2. バイオ・バンディングがもたらす影響

バイオ・バンディングによってアスリート間の身体的な差異をなくすことで主に3つの観点から影響を挙げることができる。

### (1) トレーニングの観点

若年者のトレーニングにおいては、全てのフィットネス属性はトレーニング刺激に反応するが、スピードなどの一部の身体的資質は特定の成熟期に順応するのにより敏感になる場合がある<sup>34)</sup>。さらに、成長期は酷使による怪我、特にオスグッド・シュラッター病のリスクが高まる時期である。そのため、トレーニング負荷とアスリートの健康は、酷使による怪我を避けるために成長スパート中に注意深く監視する必要がある<sup>8)9)</sup>。したがって、身体的な差異によって生じる強い衝撃や負荷をなくすためにもバイオ・バンディングに取り組むことで、トレーニングにおいても利点をもたらすことができる。

### (2) 競争の観点

競争は、成長や成熟の個人差がプレイヤーのパフォーマンスと若いアスリートの発達に影響を与えることが示されているユーススポーツプログラムの不可欠な要素である<sup>62)</sup>。早熟者は、優れている体格と運動能力の影響で競争上の優位性を経験する可能性があり、より優れていると認識されやすい<sup>11)</sup>。そして、早熟者が物理的な優位性を利用し、技術的および戦術的スキルを無視することを助長する可能性があり<sup>35)</sup>、身体的に一致する対戦相手との将来の競争に対して十分な準備ができていないことが

頻繁に起こりうる<sup>62)</sup>。そのため、このような事態を起こさせないためにも、バイオ・バンディングの実践によりフィジカルだけの勝負が起きないようにすることができ、身体的な面以外での競争を促すことが可能である。

### (3) タレント発掘の観点

成熟がスポーツにおける識別と選択のプロセスに及ぼす多大な影響を認識することも重要である。ある先行研究によると、遅熟者はイングランドのプレミアリーグに所属するマンチェスターユナイテッドやアスパイアアカデミーなどのエリートサッカーアカデミーに留まる可能性が10分の1であることを示唆している<sup>7)</sup>。これに関連して、いくつかの先行研究はバイオ・バンディングが相対的な年齢効果の影響を減らすことにより、このような問題の有用な解決策を提供する可能性があることを報告している<sup>36)</sup>。したがって、バイオ・バンディングを実践することで、才能のあるアスリートを機関やクラブが保持することに役立つのである。

### 3. バイオ・バンディングの測定方法

アスリートの成熟度を 2 次性徴などのいくつかの方法で評価することは侵襲的で非現実的であるため<sup>33)</sup>、現在、成熟を推定するための 2 つの非侵襲的で低コストの人体測定法が若いアスリートに使用されている。

#### (1) Predicted Adult Height (PAH)

PAH は成熟度の推定値であり、Khamis-Roche モデルを使用して計算される<sup>27)</sup>。Khamis-Roche モデルの公式は、「予測成人身長 =  $\beta_0 + \beta_1 \times \text{身長} + \beta_2 \times \text{体重} + \beta_3 \times \text{両親の平均身長}$ 」であり、 $\beta_0 \sim 3$  はデータに基づく男女別変数となっている<sup>28)</sup>。観察時に PAH を使用すると、アスリートを成熟度のカテゴリに分類することができる<sup>33)</sup>。主に以下の表 12 のような分類ができる。

表 12 アスリートの成熟度の分類

思春期前	< 85% of PAH
思春期初期	85-90% of PAH
思春期中期	90-95% of PAH
思春期後期	>95% of PAH

#### (2) Peak Height Velocity (PHV)

子供がピーク身長速度からどれだけ離れているか、またはそれを過ぎているかの推定値であり、年齢・身長・着座高さ・体重を使用して、ピーク高さ速度からの年齢を予測する<sup>42)</sup>。この方法

は、成熟が進んでいるアスリートは予想よりも早く、成熟が遅いアスリートは予想よりも遅く最高速度を経験するという論理に基づいている。予測された PHV は、成熟状態（ピーク前、前後、またはピーク後の高さの速度）の指標として提案されたが、代わりに成熟時期の指標としてよく使用される<sup>33)</sup>。

#### 4. ベルギーにおけるバイオ・バンディング

ベルギーのバイオ・バンディングにおける取り組みをベルギーでは【Belgian future project】と呼び、このプロジェクトは2008年の9月から始動した。始動した理由は、ベルギーという国は周辺の国と比較して面積・人口共に非常に小規模な国であるため、選手のタレントを簡単に見過ごす事が出来ず、大切に観察する必要があると考えたからである。ユース世代の選手たちは生物学的に成長スピードが異なるため、どうしても身体的に差が生まれてしまう。そこで、このような身体的な成長の差を考慮した対応策としてバイオ・バンディングという育成法を実践している。成熟した選手にはフィジカル的に同等の選手とプレーさせることでそれ以外の要素である判断力や技術を磨き、身体的に成熟が遅い選手にはフィジカルだけで勝負が決まってしまうような環境を用意する<sup>72)</sup>。具体例としてベルギー代表においては、今では世界的に名プレイヤーであるケビン・デブライネも身体的には遅咲きの選手であったため、late mature playerとして区分されていた。表13のように、彼はユース時代においてはそれぞれのアンダー世代のベルギー代表に招集されたことがなく、プロになってから初めてベルギーU18に招集された。ユース時代の彼はロングボールを蹴るだけの筋力がなく、ショートパスだけを繋ぐ平凡な選手だと考えられていた<sup>72)</sup>。しかし、ベルギー代表の育成チームは彼の武器であった「優れた判断力」を高く評価したことで彼をユースチームに選抜し続け、身体面だけでなく技術面における成長を促していった<sup>73)</sup>。そして、彼の身体的な成長が周囲に追いついた際には、ヨーロッパのトップレベルで活躍す

ることができ、今では世界でも屈指のスタープレイヤーに登りつめた。また、U15, 16, 17のチームにおいてはそれぞれの世代で early team と future team の2チームをつくり、トーナメントの大会を開催している。そうすることで、身体的な差をなくすことができ、クラブや指導者は選手の才能を評価する際に身体的な成熟スピードという要素を意図的に除外することが可能になる<sup>73)</sup>。

2018年にロシアで開催されたW杯における3位決定戦のイングランド戦ではスターティングメンバーの11人中5人が遅咲きの選手である。そして、ベルギー代表におけるタレント育成では主に5つの能力を重要視している。図8のように①勝利への考え方②将来の身体の成長③試合を読む力④ボールコントロール⑤学習能力、これらに重きを置いており、遅咲きの選手は身体が小さいためサバイバルさせるために特に③試合を読む力と④ボールコントロールを成長させることを優先している。

このように、ベルギーにおいては、「バイオ・バンディング」という育成法を実践することで、見過ごされやすい遅咲きの選手に対して将来の可能性を見据えた指導を行うことが可能である。

表 13 ケビン・デブライネの経歴

ユース	
年	クラブ
1999-2005	ヘント(BEL)
2005-2008	ヘンク(BEL)
プロクラブ	
2008-2012	ヘンク(BEL)
2012-2014	チェルシー(ENG)
2012-2013	ブレーメン(GER)
2014-2015	ヴォルフスブルグ(GER)
2015-	マンチェスター・シティ(ENG)
代表	
2008-2009	ベルギーU18
2009	ベルギーU19
2011	ベルギーU21
2010-	ベルギーA代表

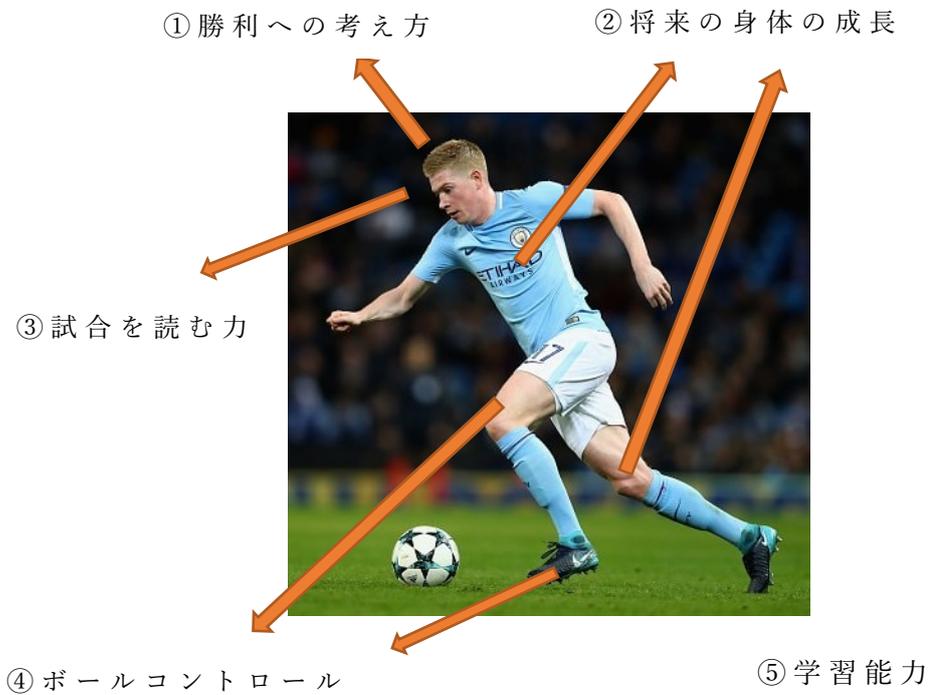


図 8 タレント育成について

## 第 2 節 ゲーム形式を中心とした練習

### 1. 認知・判断・実行のプロセス

ゲームにはサッカーの試合において数多く行う認知や判断が多く含まれているため、いわゆる「ゲームは先生である」ことを強調していた。ベルギーにおいては、可能な限り試合の状況に近いリアリティのある環境を作り出して練習を行うことを非常に重要視しているため、練習メニューとしてゲーム形式の練習を非常に多く取り入れている。サッカーはあらゆるスポーツの中において特に「脳」を使うスポーツである。そのため、ゲーム形式の練習によって常に相手からのプレッシャーがかかっている状態を作り出すことができ、試合を想定しながら練習に臨める。実際の試合中では図 9 のようなサイクルを定期的に回しており、このサイクルを瞬時に行う必要がある。そのため、練習においてはリアリティのある環境を整えるために実際の試合中と同じような図 9 のサイクルを回して実践している。このサイクルは、まずは自分の周囲の環境を照らし合わせて相手や見方がどこにいるかなどの位置情報を素早く認知する。次に、1 番適当なのはドリブルかパスかシュートかなどを判断する。そして、自分で判断したアクションを実際に行動に移した後、その行動の成否や結果などについて自己評価し、再度自分の周囲の環境を認知するというサイクルを試合中に何度も行う。サッカーに限らずスポーツはこのプロセスを回してプレーしている。特に、サッカーやバスケットボールなどの球技かつネットを挟まない侵入型スポーツはこのプロセスを試合中にボールを保持している時や保持していない時に関係なく、常に素早く的確に回さなくてはならな

い。知覚認知スキルは、サッカーをはじめとする様々なスポーツにおける熟達化の重要な要因と考えられている<sup>1)</sup>。そして、サッカーにおいて優れたパフォーマンスを発揮するためには、外的環境から必要な視覚情報を効率的に抽出し、その情報をもとにして状況を的確に判断し、狙った場所に正確にボールを蹴るといった運動が求められる<sup>47)</sup>。加えて、サッカーはどんなに優れたボールコントロールの技術、足の速さ、持久力、体の大きさを備えた選手でも、より効果的な判断を下せなければ、結果的にはボールを失ってしまう<sup>30)</sup>。サッカーの試合中に起こるミスのうち70%は認知から判断のプロセスである<sup>2)</sup>。そのため、認知から判断のミスを少なくすることが試合を上手く運んだり、ボールを相手に奪われたりしないための重要なポイントである。Vaeyensら(2007)は戦術的判断に優れたサッカー選手とそれに劣るサッカー選手の比較から、視覚探索活動の違いについて調査した。その結果、戦術的判断に優れたサッカー選手は、それに劣るサッカー選手と比べて、ボール保持者への注視に長い時間を費やすことや、ボール保持者から他の場所に頻繁に注視点を移動させていることを報告している<sup>69)</sup>。

このように、サッカーにおける認知から判断までのプロセスがいかに重要であるかが伺える。そのため、ゲーム形式の練習に取り組むことで選手たちにプレーの自由や自律を与えることを可能にし、試合中に行われるサイクルを回す経験を練習の段階から積むことができる。その結果、クリエイティビティな選手を育むことを可能にする。ここでいうクリエイティビティは難易度の高いトリッキーな技を披露できることではなく、試合中に

迫ってくる1つ1つのプレーに対する判断を素早く正確に行うことができる選手のことを指す。

加えて、ゲーム形式の練習を中心にトレーニングセッションを構成することで認知的アプローチとゲーム型アプローチの両方に取り組むことができる。認知的アプローチは先程述べた通りのプロセスであり、ゲーム型アプローチは実際の試合と同等のシチュエーションやスペース、味方や相手チームとの距離を想定しながらゲームを行うことができるので、視覚的にもよりリアリティのある環境を整備することが可能である。また、ゲームはより多くの判断が含まれているだけではなく、より楽しくモチベーションを保つことができる。ちなみにベルギーでは少なくともトレーニングセッションの50%はゲーム形式の練習で構成されている。そして、ゲームはゴールではなくあくまでツールであり、勝つことではなく楽しく学ぶことを注視している。そのため、U14までは点数表は無しとしており、試合の結果を突きつけて脅かさないようにしている。

したがって、ゲーム形式の練習を中心にするすることでサッカーに必要な不可欠な認知・判断・実行のプロセスを回す能力を向上させることが可能である。

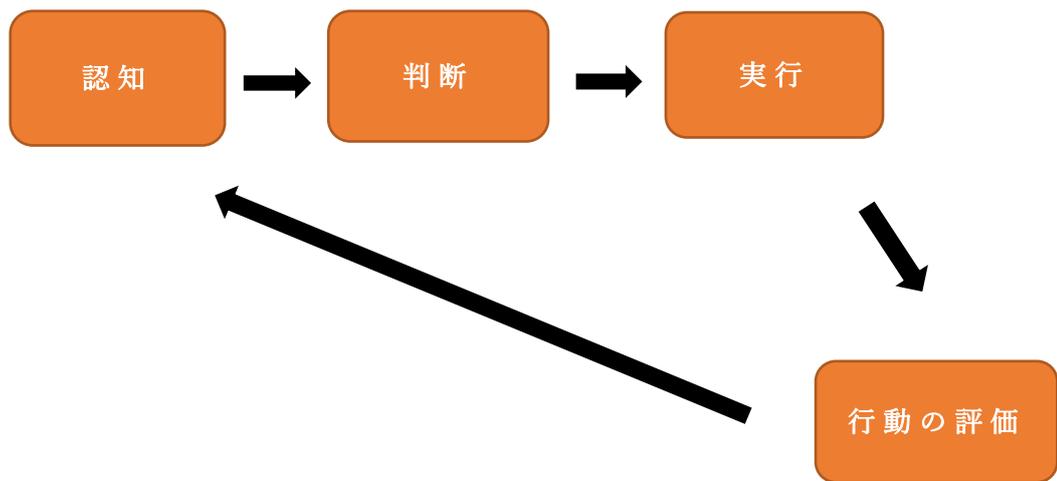


図 9 試合中のサイクル

## 2. ゲーム形式の練習をする際の指導法

楽しく学ぶことを重要視することで、選手たちに自由と規律を与えることができるが、自由と自律が間違っ て解釈される場合が存在する。ただ選手たちにプレーさせているだけの「放任主義者」では指導者としての存在意義が失われてしまう。コーチの役割として介入していくことも含まれているため、その程度や頻度を考えなくてはならない。反対に、選手たちに過度な介入をしてしまう「熱血指導」は、子供たちの学習意欲を削いでしまうこともある。選手たちの保護者はこのような「熱血指導」を歓迎するが、ベルギーではそのような指導者を「プレステコーチ」と呼んでいる。プレステとはプレイステーションの略で家庭用ゲーム機を指す。試合が始まれば目の前のプレーの決断者は選手自身であり、指導者は判断の助けをしてくれない。そのため、プレステのコントローラーのようにコーチから指示されたことだけを忠実にこなすのではなく、自分で判断できる責任を選手たちに日々の練習から提供することが重要である。

そこで、選手たちを指導する際に必要であるのが「話す量を減らし、観察すること」である。指導者は常に何かの指示やアドバイスをしていればいいわけではない。一歩引いて、より長時間選手たちを観察すれば問題を定義できるようになり、その結果として、選手が自分自身で決断できる力を培うことが可能である。加えて、選手たちに対する「質問の投げかけ」もコーチングにおいて欠かせない。指導者は選手に賢いと思われたいから指示をすることが多いが、選手たちに質問をして聞くことが重要になる。試合中はそれを繰り返すことになるため、問題に直面し、仲

間と解決するという観点からでも選手たちに自由と自律を与えることができる。

### 3. 他国における認知から判断の重要性

現在、ベルギーは隣国であるドイツの「認知」や「判断力」を重要視する考え方を参考にして、選手育成においてこれらに重点を置いている。そのドイツではベルギーと同じく 2000 年に開催された欧州選手権においてグループリーグを敗退した背景から、ドイツサッカー協会が主導で選手育成の大改革を実施した<sup>45)</sup>。その中で、ドイツは他国のノウハウをコピーするだけではないオリジナルスタイルを目指し、「判断スピード」を向上させることに焦点を当てた。状況を迅速に認識し、起こりうることを予測して「最適だ」と思う決断を自主的に素早く行える選手の育成に取り組んだ<sup>45)</sup>。その結果、2006 年と 2010 年に開催された W 杯では 3 位、2014 年に開催された W 杯では優勝という 3 大会連続で輝かしい成績を収めることができた。加えて、このような「判断スピード」の向上に取り組むことで、1 回に触れる平均ボールタッチ時間が大幅に短くなった。2006 年の W 杯では 2.8 秒だったのが、2010 年の W 杯では 1.1 秒にまで短縮した<sup>45)</sup>。したがって、認知から判断までのプロセスのスピードを速くする取り組みをしたことが W 杯で上位成績を安定させることができた要因の 1 つであると考えられる。このことから認知から判断までのプロセススピードを速くする重要性を見受けられる。

スペインにおいても「状況判断スピード」に重きを置いている。スペイン公認上級ライセンスを持ち、スペインサッカー協会のコーチングスクール上級クラスで使用する教材作成プログラムをコーディネートしたことがあるランデル・エルナンデス・シマル氏（2009, 2012）は、「判断力は育成において最も重要視すべき

ポイントの 1 つであり、ただ実行するだけの練習ではなく、選手が判断しなければいけない状況を作り出すことが重要である」と述べている<sup>30)32)</sup>。そして、2008 年と 2012 年の UEFA 欧州選手権を連覇、2010 年に開催された南アフリカ W 杯で初優勝を果たしたこれら 3 つの国際大会においてスペイン代表のメンバーの大多数が所属している FC バルセロナの育成年代において、コート小さくしてプレッシャーがかかる状況を作ったり、ドリブルからシュートまでの動作を速く行っていたりと、全ての練習においてプレーを読む力＝状況判断を養うトレーニングを実施している<sup>23)</sup>。

サッカーは常に自分の身の回りの状況が変化し続け、1 つ 1 つのプレーにおける絶対的な正解は存在しない。試合中にプレーするのは監督やコーチではなく選手自身であり、目の前のプレーに対して常に判断していくのである。実際に「判断力」を特に重要視し、普段のトレーニングの段階から「判断力」が培われる状況を作り出しているドイツとスペインは見事 W 杯優勝という素晴らしい成績を収めることに成功している。そのため、選手が自ら判断できる力を養っていくのは必須であると考えられ、国際大会で優勝を目指すためには「判断力」を向上させることは必要不可欠であると考えられる。

### 第 3 節 国外クラブへの積極的な移籍

#### 1. 他国リーグへのステップアップ

ベルギーは選手たちを取り囲む環境をよりレベルの高いものにするために、自国リーグよりもレベルの高い国外クラブへの移籍を積極的に促している。2000年に開催された UEFA 欧州選手権の敗退をきっかけにベルギーはサッカーを根本的に改革しようと試みた。その頃、ベルギーと同様に同大会のグループリーグで敗退した隣国のドイツも育成システムを改革した。全国 300 箇所に育成組織の拠点を作り、学業の週 2 コマを使って単位認定するなど、国家を挙げて育成改革に取り組んできた<sup>60)</sup>。しかし、ベルギーはドイツと比べて W 杯での優勝経験がないだけでなく、国土面積が 10 分の 1、人口も 8 分の 1 と小国にすぎないため、ドイツのように大規模な改革を実行するだけのリソースがない<sup>16)</sup>。そこでベルギーが考えたのが、「必ずしも国産にこだわる必要がなく他国の力を借りる」ということであった。そして、象徴的であるのが、ベルギーリーグの中でも小クラブであるベールショットとオランダの最大のクラブであるアヤックスがユース育成の提携を結んだことである。この提携は図 10 のようにアヤックスからコーチを派遣してベールショットの育成組織を整備してもらい、優秀な選手は優先的にアヤックスに加入させるという内容である<sup>16)</sup>。この提携によってアヤックスだけでなく、元々育成環境が乏しかったベールショットにもメリットをもたらすことに成功した。

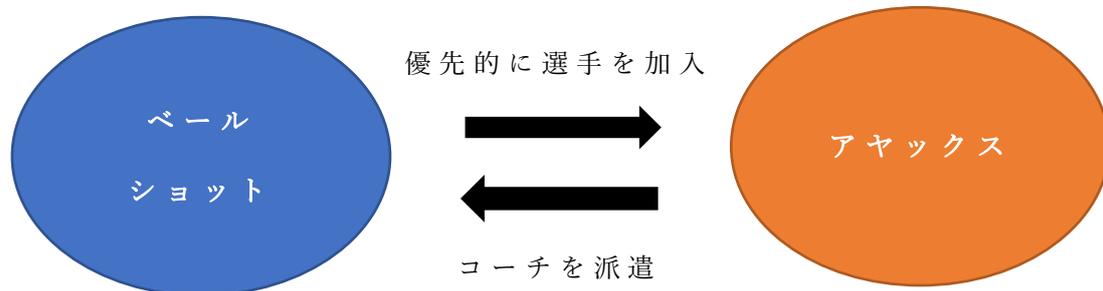


図 10 ユース育成の提携

しかし、このまま他国の力に依存しては世界のトップレベルにはほど遠い。こう考えた結果、先程も述べたオランダ・フランス・ドイツのそれぞれの良い部分を融合させた新しい育成法を導入した。自国で育成して、選手が大成する前に自国リーグよりもレベルの高い国外リーグに移籍させるという流れを活発化させることで、より精神的にも技術的にも成長させることができる。その背景にはベルギーの地理的条件や言語的背景が存在すると思われる。ベルギーにはオランダ語、フランス語、ドイツ語の全部で3つの公用語があり、周辺には多くの国に囲まれている。そのため、ベルギーはヨーロッパの中においても交通の要衝として知られており、多国籍の人々が往来している。このような背景から、ベルギー人は様々なバックグラウンドを持っている多国籍の人々とのコミュニケーションを図ることに慣れているため、周辺の国に移籍したとしても、言語の壁にぶつかることなく新しい土地に早く馴染むことが可能である。加えて、このように多くの国に囲まれているため、周辺の各国がベルギーまで訪れてスカウトしに来ることも容易である。周辺のオランダ、フランス、ドイツとは隣接しており、イギリスとはドーバー海峡を挟

んで近くに位置している。これらのサッカーリーグは The Kick Algorithms (2022) が発表した 2022 年の世界リーグランキングにおいて、表 14 のようにベルギーリーグは 10 位だったのに対して、オランダのリーグであるエールディヴィジは 8 位、フランスリーグであるリーグアンは 5 位、ドイツリーグであるブンデスリーガは 4 位、イングランドのプレミアリーグは 1 位<sup>67)</sup>とベルギーリーグよりもレベルの高いリーグである。そのため、これらの国のリーグに所属しているクラブにスカウトされることで、選手自身がステップアップすることが可能である。

表 14 世界リーグランキング (2022 年)

順位	リーグ名
1st	プレミアリーグ(ENG)
2nd	リーガ・エスパニョーラ(SPA)
3rd	セリエA(ITA)
4th	ブンデスリーガ(GER)
5th	リーグ・アン(FRA)
6th	プリメイラ・リーガ(PRT)
7th	ロシア・プレミアリーグ(RUS)
8th	エールディヴィジ(NLD)
9th	リーガMX(MEX)
10th	ジュピラー・プロ・リーグ(BEL)

2018 年にロシアで開催された W 杯のベルギー代表 23 名のうち、表 15 のようにわずか 1 人しか国内リーグに所属しておらず、残りの 22 名は主にヨーロッパの主要リーグに所属している。また、図 11 を見てみると国外リーグに所属している 22 名の選手のうち 15 歳以内で国内リーグから国外クラブに移籍しているのは

5名、16～18歳で国外クラブに移籍したのは6名と、日本でいう高校を卒業する年代までに国外クラブに移籍しているのは約半分である。このことから、ベルギーでは可能な限り若いうちから国内リーグよりもレベルの高いヨーロッパの主要リーグに移籍させていることがわかる。これはベルギーには公用語が3つあること、隣国との親交が活発で隣国にはサッカーの強豪クラブが多数所属している、これらの歴史的背景があるベルギーであるからこそ、まだプロではないユース時代からの移籍が可能である。

表 15 国外クラブへの移籍

選手名	経歴	年齢(国外クラブへの移籍)
クルトワ	ヘンク→チェルシー(ENG)	19
ミニヨレ	シント＝トロイデンVV→サンダーランド(ENG)	22
カステールス	ヘンク→ホッフェンハイム(GER)	19
デンドンケル	アンデルレルヒト	—
ボヤタ	RWDMブリュッセルFC→マンチェスター・シティ(ENG)	15
アルデルヴァイレルト	ベールショット→アヤックス(NLD)	15
ヴェルトンゲン	ベールショット→アヤックス(NLD)	16
コンパニー	アンデルレルヒト→ハンブルガー(GER)	20
ムニエ	クラブ・ブルーージュ→パリ・サンジェルマン(FRA)	25
ヴェルマーレン	ベールショット→アヤックス(NLD)	14
ヴィツェル	スタンダール・リエージュ→ベンフィカ(POR)	22
カラスコ	ヘンク→モナコ(FRA)	17
ティーレマンス	アンデルレルヒト→レスター(ENG)	20
トルガン・アザール	テュビズ→ランス(FRA)	14
シャドリ	スタンダール・リエージュ→MVVマーストリヒト(NLD)	16
フェライニ	スタンダール・リエージュ→エヴァートン(ENG)	20
デンベレ	ベールショット→ヴィレム(NLD)	18
デブライネ	ヘンク→チェルシー(ENG)	19
エデン・アザール	テュビズ→リール(FRA)	14
ルカク	アンデルレルヒト→チェルシー(ENG)	18
メルテンス	ヘント→AGOVV(NLD)	20
バチュアイ	スタンダール・リエージュ→マルセイユ(FRA)	21
ヤヌザイ	アンデルレルヒト→マンチェスター・ユナイテッド(ENG)	16

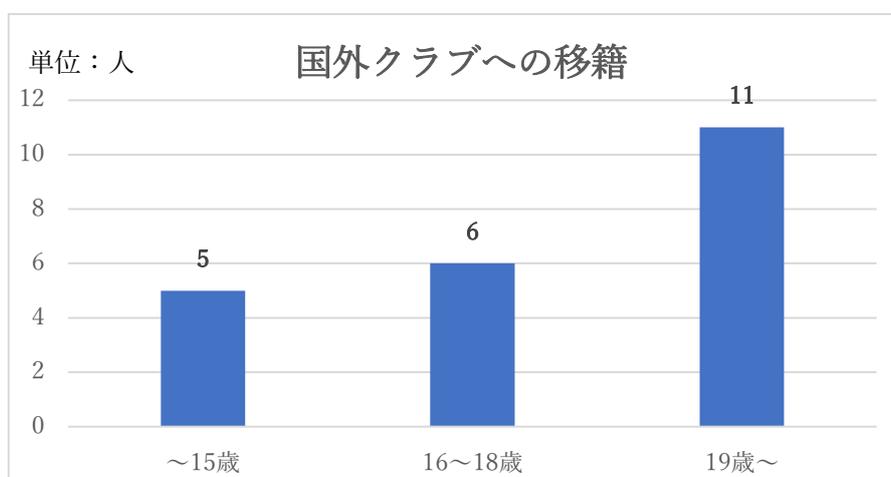


図 11 年齢別の国外クラブへの移籍

## 2. 育成を重要視した移籍金ビジネス

ベルギーリーグは図 12 のように、アンデルレヒトやゲンクなどの 5 クラブが上位グループを構築し、その他クラブがそれに挑む構図となっている<sup>56)</sup>。その他クラブが可能性を見出された選手を主要 5 クラブに移籍させ、その主要 5 クラブは欧州ビッグ 5 などの他国リーグに選手を移籍させることを考える。このような構図を構築することでベルギーリーグが潤い、欧州内での競争力も高まる。加えて、ベルギーリーグの各クラブは選手を売ったことで獲得した移籍金をトレーニング施設の充実さや良い指導者の招聘、育成費用などに充てることが可能になり、さらなるクラブの強化を図ることができる。ここ最近では、ベルギーリーグから世界のトッププレイヤーになったデブライネやアザール、ルカクの欧州トップでの活躍により、欧州ビッグ 5 リーグからの関心はさらに増えた<sup>56)</sup>。

このような移籍金ビジネスは他リーグにおいても見られると思われる。しかし、ベルギーリーグが他リーグと異なる点は、ベルギーリーグの主要 5 クラブでさえも「育成」が最も重要な目標ということである。他リーグのイングランドのプレミアリーグやスペインのリーガエスパニョーラの強豪クラブは、国内リーグの制覇やヨーロッパの No.1 のクラブを決める大会である UEFA チャンピオンズリーグの制覇を目標として移籍金ビジネスやクラブを運営する。一方、ベルギーリーグに所属している主要 5 クラブも国内リーグなどの制覇を目標としているが、最も優先すべきことが「育成」であるため、選手の育成を念頭に置きながら移籍金ビジネスを行っている。これはベルギーリーグにはヨ

ヨーロッパの中で強豪クラブと呼ばれるクラブが存在しないことや世界リーグランキングにおいて上位ではないことに加えて、ベルギー全体が「育成」を重要視している姿勢を見せている背景があると思われる。ベルギーリーグの意図や姿勢を各クラブが共有することで、選手育成の重要性を国全体に浸透させて統合している。

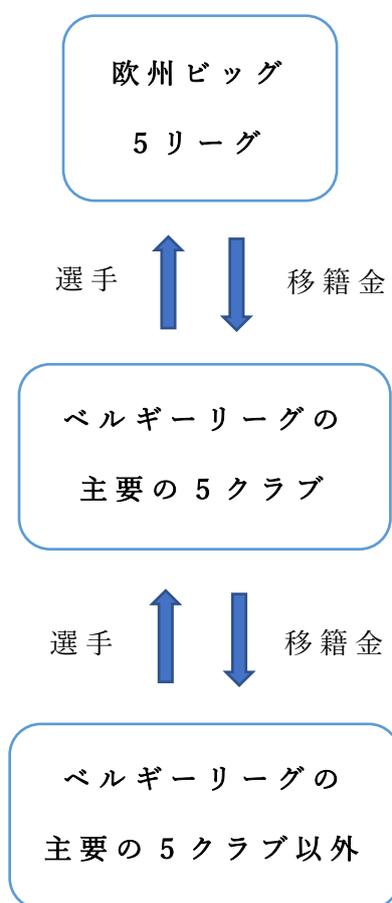


図 12 ベルギーの移籍金ビジネス

## 第 4 節 ベルギーにおけるサッカーの普及

### 1. 7~9 歳への指導による普及

間接的なコーチング指導として、7~9 歳への指導も非常に重要であることを強調していた。この年代への普及に力を入れることで、サッカーへの興味や関心を抱いてもらえるように仕向け、将来の有望なサッカープレイヤーを 1 人でも多く生み出すことを狙いとしている。この年代への普及を促すためには、小学生年代の重要性を国全体で共有することが必要不可欠であると主張していた。先程も述べたが、ベルギーは周辺の国と比較しても面積・人口共に小規模であるため、選手を簡単に見過ごすことができない。そのため、小学生年代からの普及を伴うことで 1 人でも多くのタレントの発掘・育成に力を入れる。その中でも 7~9 歳頃の世代の子供たちへの指導は非常に重要であると述べていた。その理由は、U7~9 の選手たちはサッカーがどのようなスポーツであるかを理解することが難しいが、U19 の選手はサッカーの本質を把握することができているため、そういう意味では小さな子供たちに対してサッカーコーチングする方が難しい。しかし、小学生年代の子供たちは練習や試合を楽しく過ごすことができたことでポジティブな記憶として残るなら次回も参加してくれる。そのため、コーチが子供たちのサッカー体験を成功に導くことで、子供たちのサッカーに対する興味や関心を多く積ませる。また、ベルギーでは 6~7 歳を指導するためのスペシャリストコースが組まれている。このことからこの年代の指導に対して非常に重きを置いていることが明らかである。

この年代に対する具体的な指導法としては、少人数のグルー

プを構成することが必要不可欠である。こうすることで、指導者と選手が密接に繋がることができ、選手は飛躍的に向上し、子供たちはまた練習に参加したい感情を抱くようになる。指導者は選手をコントロールしたが、選手が自分自身を表現できる環境を提供するには子供に自由を与えることが重要である。仮に間違っただけを実践すると子供たちは練習に参加する意欲がなくなるため、練習メニューなどの前に子供たちが自由にプレーできる環境を整えてあげる必要がある。

そして、小学生年代の子供たちがゲーム形式の練習を行う際、最適な人数で行わなければいけないことも主張していた。試合で選手が下す最も基本的な決断は「ドリブルかパスか」である。例えば5対5であれば1人につき少ない回数しか起きず、ボールを持っている選手しかその決断を下すことができない。そのため、2対1から始め、3対2まで発展させていくことで5対5の要素を含ませることができる。これらは練習のゲームかつ個人を育てるゲームであり、図 13.14.15 のような2対1, 2対2, 3対2がサッカーの土台になる。

小学生年代の子供たちに対する具体的な練習プログラムとしては、このようなゲーム形式の練習が中心である。U7は図 16 のようにピッチの広さが縦 15m・横 25m でゴールキーパーとフィールドプレイヤー2人の3 vs 3であり、トライアングル1つとデュエル2つの構造となっている。次に、U8とU9は図 17 のようにピッチの広さが縦 25m・横 35m でゴールキーパーとフィールドプレイヤー4人の5 vs 5であり、ダイヤモンド1つとデュエル4つの構造となっている。

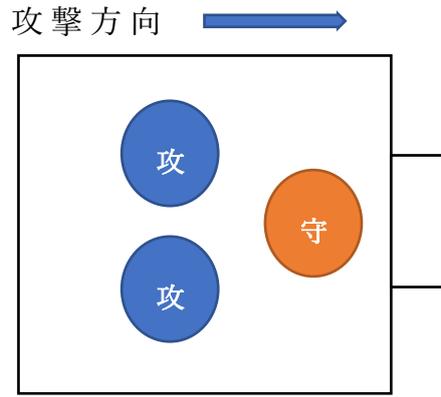


図 13 練習の土台① 2 vs 1

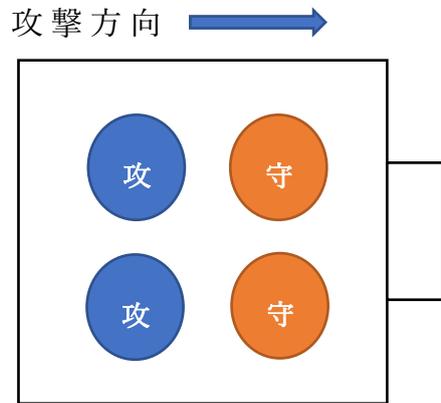


図 14 練習の土台② 2 vs 2

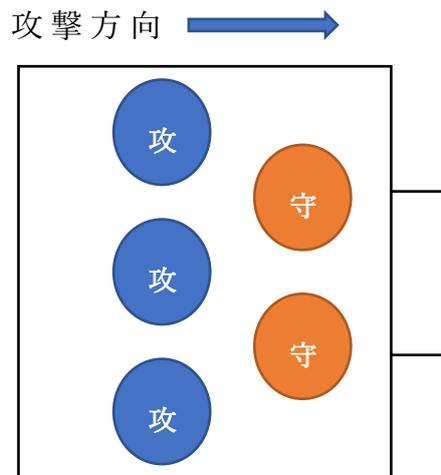


図 15 練習の土台③ 3 vs 2

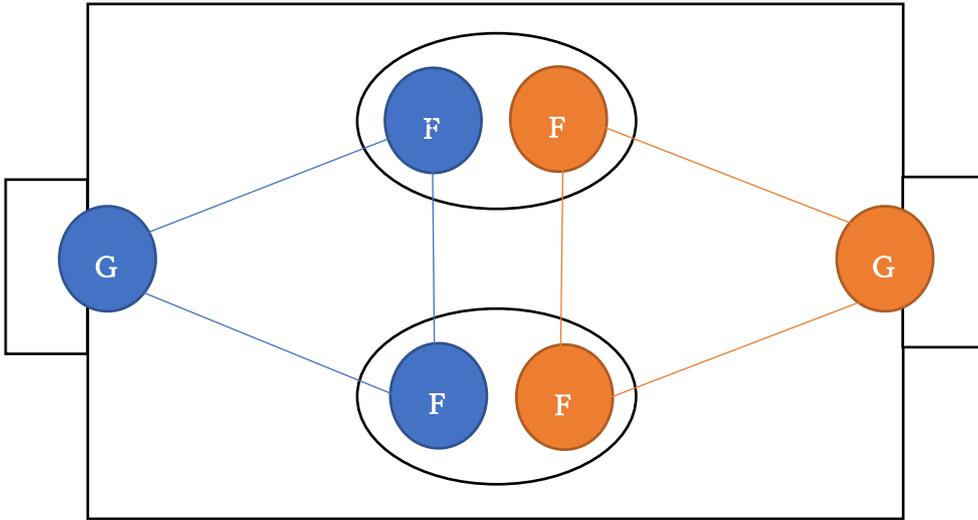


図 16 U7 の練習プログラム<sup>4</sup>

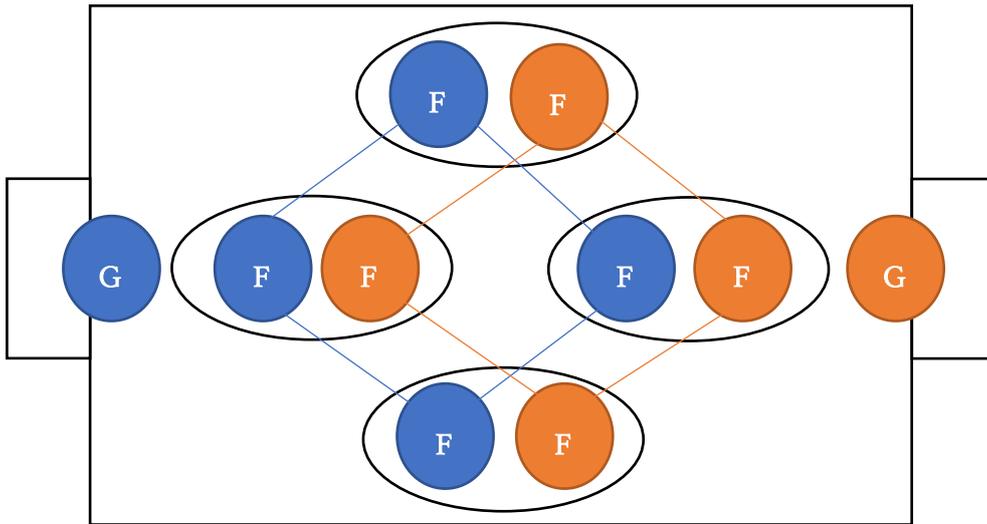


図 17 U8 と U9 の練習プログラム<sup>4</sup>

<sup>4</sup> ○はデュエル（1対1），Fはフィールドプレイヤー，Gはゴールキーパー

—と—はトライアングル，ダイヤモンド

## 2. ベルギーサッカーのトリプルミッション

スポーツにおいてチームや組織を強化するためには 1 つのメカニズムが存在する。それは「勝利」「普及」「資金」の 3 つのミッションを達成することであり、これらを達成する上で経営の方向性を示す「理念」を軸に捉えることが重要である<sup>15)</sup>。この概念を「トリプルミッション」といい、下の図 18 のように 3 つの概念と「理念」が相互作用している。「トリプルミッション」の視点からスポーツの発展の一連の流れを考えると、国際大会で「勝利」すれば、テレビなどメディアで露出する機会も増え、世間からの注目度が高まる。そして、代表の試合やリーグの試合の観客動員数が増加し、さらに子どもから大人まで新たに競技を始める人が増加し、競技の裾野が拡大することで「普及」に繋がる。観客が増えれば収入も増え、注目度が高まればスポンサーや多くの「資金」を獲得できるため、その「資金」を選手の育成や「勝利」に注力できる<sup>15)</sup>。これからトリプルミッションを用いながらベルギーサッカー界のスポーツビジネスについて考察していきたい。

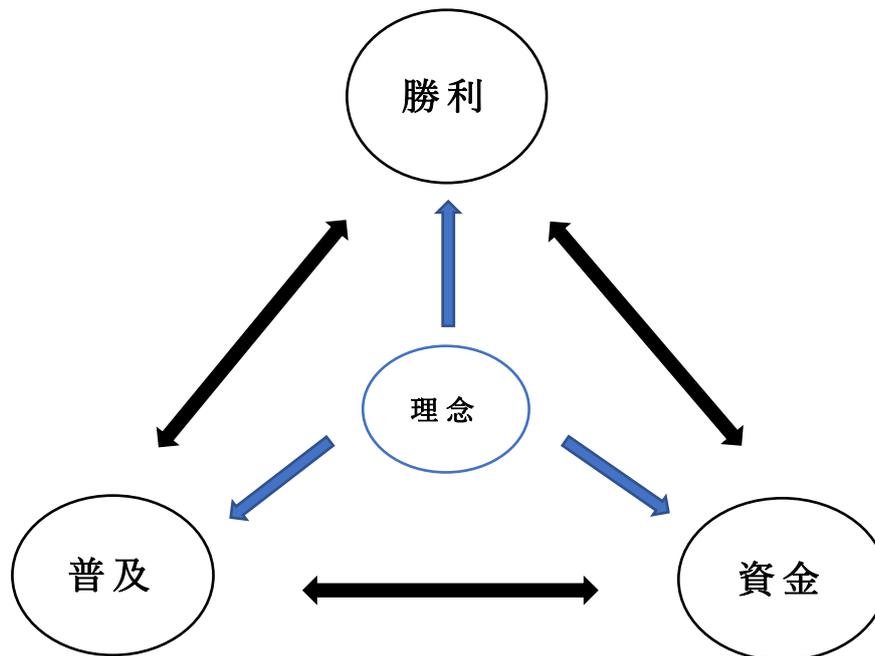


図 18 トリプルミッション

(1) 「普及」からのアプローチ

スポーツの「普及」はスポーツ全体が発展するのに不可欠である<sup>15)</sup>。ベルギーは2000年に自国で開催されたUEFA欧州選手権での敗退をきっかけに根本からベルギー代表を強化する方針を固めた。コーチングメソッドの大幅な変更や国内にエリートスクールを新たに8カ所設立するなど有望なサッカー選手を育成するために様々な取り組みを実施している。ベルギーでは7～9歳への指導に関して非常に重要視しており、この年代を指導するためのスペシャリストコースが存在する。ベルギーでは小学生年代からのサッカーの普及の重要性を国全体で共有しており、積極的に若い世代に対してサッカーの普及を促している。この取り組みによって小学生年代からのサッカーへの興味や関心を多く積みせることで競技者人口を増加させている。加えて、クラ

ブとファンとの繋がりも大事にしており、クラブは全てのファンに対してのスタジアムの開放やクラブとファンとの頻繁な交流の組織など、ファン層の重要性を認識している。

「普及」の指標としては、サッカーを「する人」「観る人」の数で測ることができる。下の図 19, 20 は 23 歳未満のベルギー人選手に関する直近 4 シーズンのデータで、それぞれ総プレー数とフルタイム・パートタイムの契約数である<sup>59)60)61)</sup>。図 19 の総プレー数はほぼ横ばいに対して、図 20 のフルタイム・パートタイムの契約数は右肩上がりである。RBFA 主導の育成プログラムにより、「する人」としての普及が進んだことで 23 歳未満の若手選手との契約数が毎年増加している。一方、総プレー数がほぼ横ばいである原因も RBFA 主導の育成プログラムが影響していると考えられる。19-20 シーズンは 2020 年になってから新型コロナウイルスの蔓延により、ベルギーリーグの中断を余儀なくされたため前年に比べて大幅に減少している。また、RBFA は可能な限り若い年齢のうちから国内リーグから国外リーグへのステップアップを促している。そのため、将来有望のポテンシャルがあることを所属クラブやスカウトが見込んだら、積極的にレベルの高い国外クラブに移籍させる。シーズン途中で国外クラブに移籍させることが生じるため、総プレー数がほぼ横ばいであると考えられる。

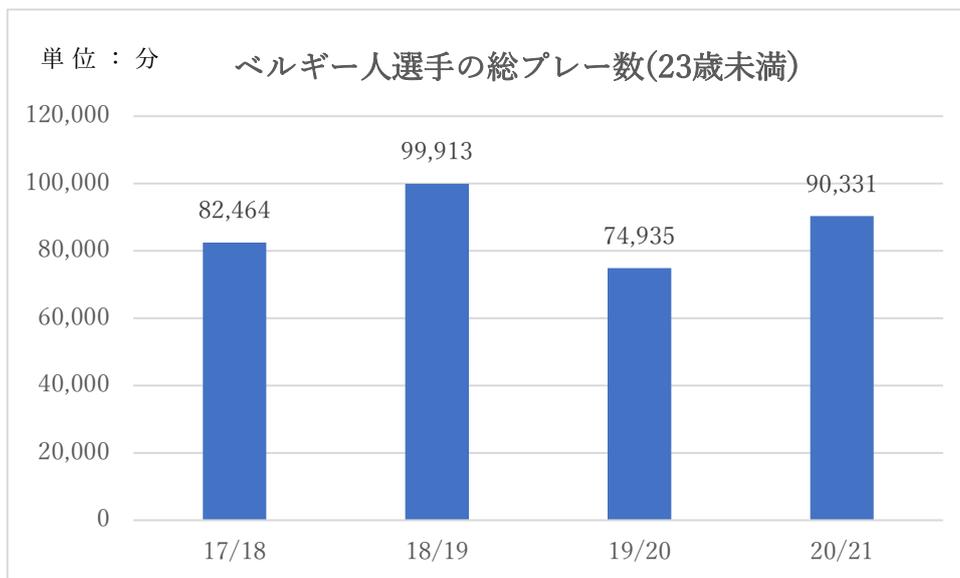


図 19 ベルギー人選手の総プレー数(23歳未満)

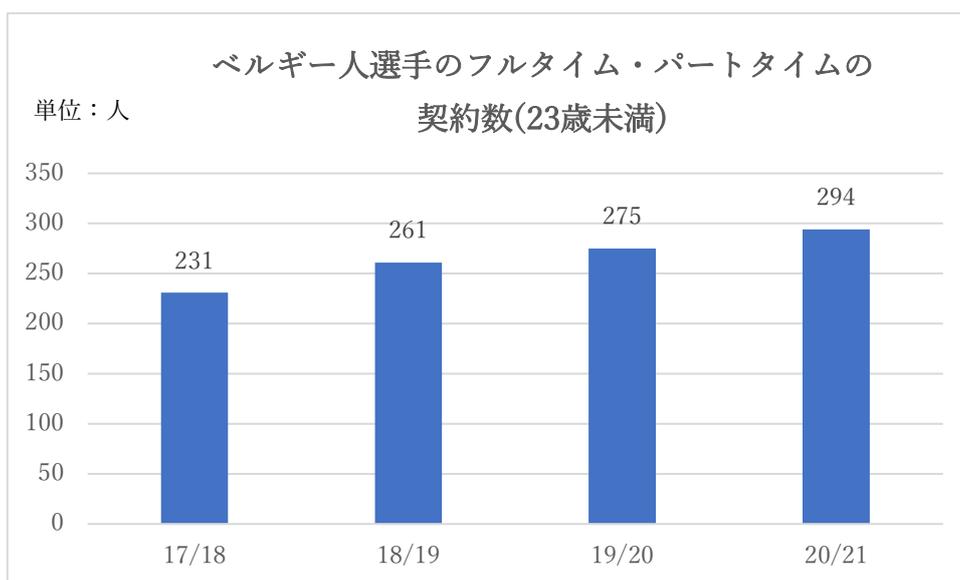


図 20 ベルギー人選手のフルタイム・パートタイム契約数(23歳未満)

次に、図 21 は Facebook, Instagram, Twitter などのソーシャルメディア（以下、SNS）の総フォロワー数である<sup>59)60)61)</sup>。こちらは

年々増加してきており、2021年は前年と比較して36%も増加した。スポーツを普及させる際には、メディアの存在が重要な役割を持つ<sup>43)</sup>。これまでサッカーと視聴者を繋ぐメディアの主体といえばテレビ放送であったが、ここ数年でSNSの存在感が大幅に大きくなっている。Kepios(2021)の調べによると、ベルギーの隣国であるフランスの2021年のSNS利用者は総人口の75.9%が利用している<sup>26)</sup>。テクノロジーの進化が飛躍的に進んできていることもあり、これからの時代ますますSNSの重要性が増していくと思われる。このようにして、ベルギーでは国単位で「する人」の増加を図ったり、クラブとファンとの繋がり的重要性を認識し、SNSを駆使することで「観る人」への普及に取り組んでいる。

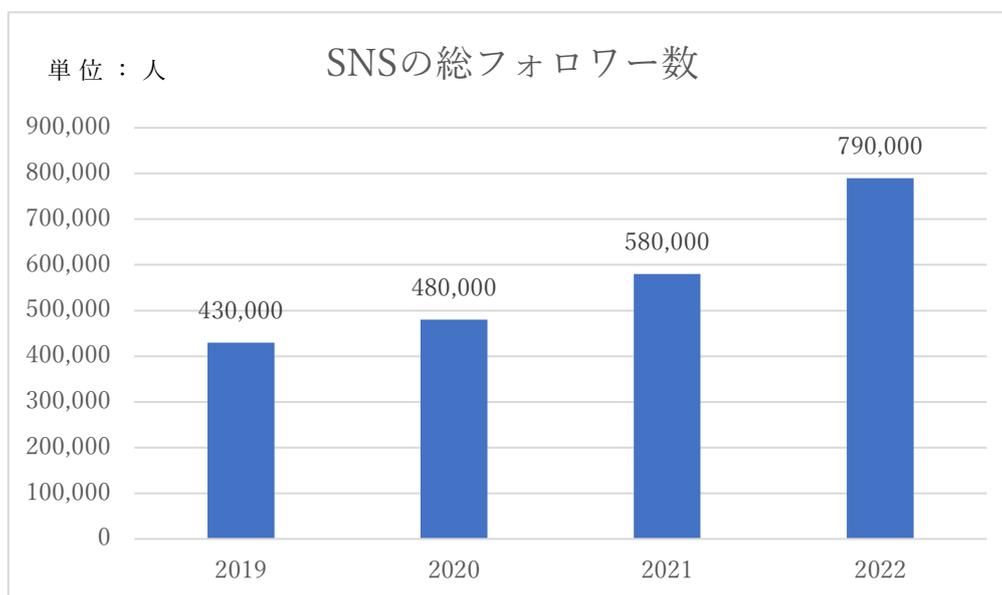


図 21 SNS の総フォロワー数

## (2) 「資金」からのアプローチ

「資金」は「勝利」や「普及」に対して投資するのに欠かせないものである。「資金」が拡大すれば、選手の補強や若手の育成、練習環境の充実といった「勝利」のための再投資が可能になるため、さらなる「普及」や「資金」の拡大につながることを考えられ、スポーツビジネスが発展していくためにも重要である<sup>15)</sup>。下の図 22 はベルギーのサッカークラブの収入の推移を 17/18 シーズンから 20/21 シーズンまで表した図である<sup>59)60)61)</sup>。19/20 シーズンの途中から新型コロナウイルスの影響でリーグ戦の中断を余儀なくされたため、前シーズンに比べて僅かに収入が減少しているが、シーズン中断の影響でこの数字であることを考えると仮にシーズンを全て消化していたならば前シーズンから大幅に収入が増加していたであろう。20/21 シーズンからリーグ戦が再開されたが、観客動員数を制限したり無観客試合での決行であったため、チケット収入は前シーズンと比較して大幅に減少している。しかし、新型コロナウイルスの蔓延によって大打撃を受けた 20/21 シーズンは大半が無観客試合で行われたのにも関わらず、前シーズンと比較してスポンサー & 広告収入が増加している。これはベルギーリーグに対する期待が大きいことや魅力があること示している。ベルギーリーグはイングランドのプレミアリーグやスペインのリーガエスパニョーラと比較しても決してレベルの高いリーグとは言えないが、このリーグから世界的トッププレイヤーが数々誕生してきている。そのため、その選手らの世界のトップでの活躍がよりベルギーリーグに対する注目度を高めてきており、さらなる企業の投資がこれから何年も

続いていくと思われる。加えて、放送権料も 19/20 シーズンと比較して大幅に増加している。ベルギーリーグは 2020 年の 6 月に Eleven Sports と契約した。チケット収入の減少により、放送権料はベルギーのクラブにおける主要の収入源となった。

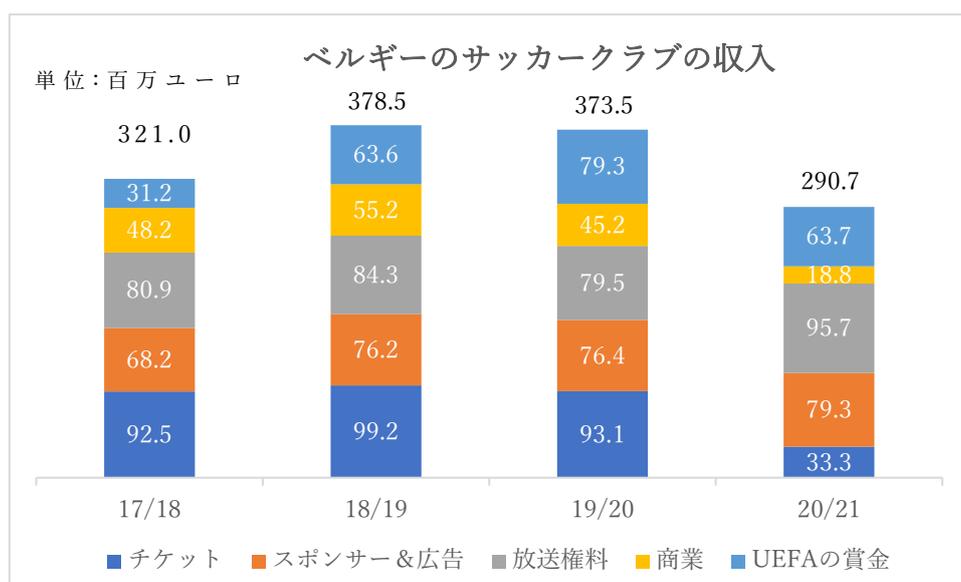


図 22 ベルギーのサッカークラブの収入

次に、図 23 はベルギーのサッカー産業の規模を示した総生産量を表した図である<sup>59)60)61)</sup>。ベルギーのサッカー産業は右肩上がりで上昇しているが、20/21 シーズンは新型コロナウイルスの蔓延により大打撃を受け、それまでの成長を打ち消す形になった。この落ち込みは、営業収益と純移籍金の両方が急落したためである。右肩上がりの背景には 2018 ロシア W 杯で同国最高成績である 3 位を取めたことがベルギーのサッカー産業に大きな経済的影響をもたらしたと考えられる。サッカーはベルギー国民にとって最も人気のあるスポーツであるため、新型コロナウイ

ルスの蔓延によって停滞したサッカー産業を以前の姿に取り戻すことは急務である。そのため、ベルギーのサッカー産業をこれからも拡大していくことは必要不可欠であり、経済におけるサッカーの重要性はこれからも高まることが予想される。

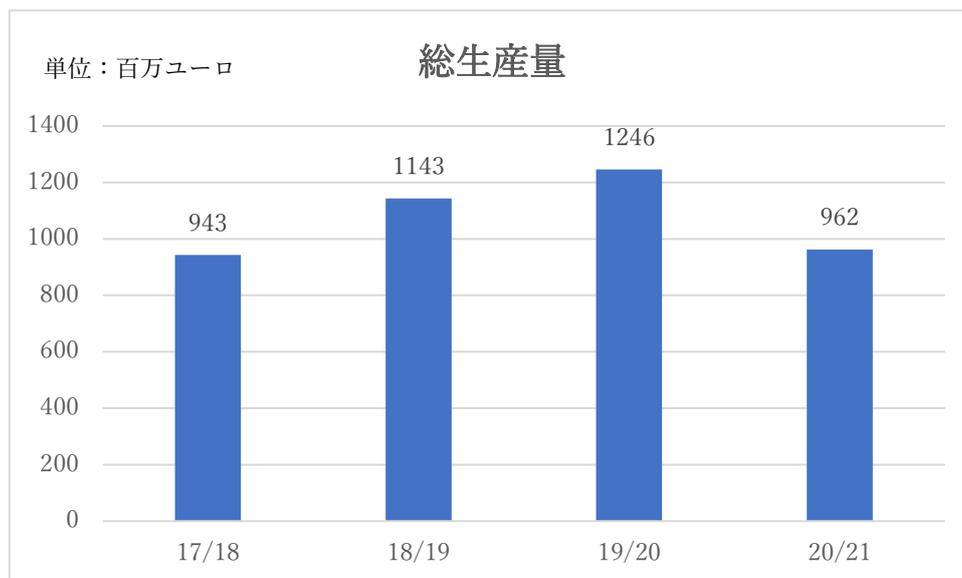


図 23 ベルギーサッカーの総生産量

### (3) 「勝利」を目指すトリプルミッション

「勝利」とは、単に勝つことではなく、「勝利」を最後まで求めること、「勝利」を追求するプロセスで多くのものが得られることを含む<sup>15)</sup>。先程も述べたが、ベルギーは国際大会での敗退を契機として、根本からサッカーベルギー代表を強化するプロジェクトを進め、RBFA 主導の育成プログラムを実施している。国際大会での「勝利」を目指すため、これまでの目の前の試合結果に拘る「結果至上主義」から長期的な育成である「未来志向」のコーチングへと変更した。図 24 は 2010 年の南アフリカ W 杯のヨーロッパ予選から 2018 年のロシア W 杯までのベルギー代表の国際大会における平均勝ち点の推移である。単純に勝ち点を合計すると、大会参加回数や予選方式、さらにはグループ内における参加国数によって試合数が異なり、時系列で統一した基準とならないため、平均の勝ち点を用いた<sup>15)</sup>。図 24 のように、育成プログラムを実施した当初である 2010 年前後は、まだ試合での結果が伴っていないが、2012 年から 2014 年にかけて平均勝ち点が約 1 も上昇した。ブラジル W 杯ヨーロッパ予選の頃から試合での「勝利」が伴い始め、2015 年には同国で初めて FIFA ランキング 1 位にも登りつめた。2014 年に開催されたブラジル W 杯のベルギー代表は平均年齢が 26.0 歳で出場国 32 カ国中 3 番目に若いチームであった<sup>64)</sup>。1 番目と 2 番目に若い国がガーナ、ナイジェリアというアフリカ勢であることを考慮すると、ヨーロッパや南米の国の中では 1 番若い国である。同大会では非常に若いチームかつ初めての国際大会を経験するチームであったため、ベルギーにとって貴重な経験値を得ることができた。この経験を

基に挑んだ次の W 杯である 2018 年のロシア W 杯では、強豪であるブラジルやイングランドに勝利したことで同国最高成績である W 杯 3 位という成績を収めた。



図 24 平均勝ち点

### 第3章 日本サッカー界への提言

#### 第1節 日本サッカー界の強化構想

##### 1. 三位一体の強化策

日本サッカー協会（以下、JFA）は、日本サッカーの強化構想として「三位一体の強化策」を掲げてきた。「三位一体の強化策」とは、図25のように①代表強化、②ユース（若年層）育成、③指導者養成という3つの部門が同じ知識・情報を持ち、より密接な関係を保ちながら、選手の強化育成と日本サッカーのレベルアップを図るというシステムである<sup>55)</sup>。その中でも、JFAは「選手たちを日々指導するのは指導者であり、質の高い選手の育成は、指導者による日々の指導のレベルが高くなくしてはあり得ない。つまりは良いユース育成をしようと思えば、指導者の質の向上が不可欠である<sup>55)</sup>」と述べている。したがって、三位一体の強化策の中でも指導者養成を重要視している。

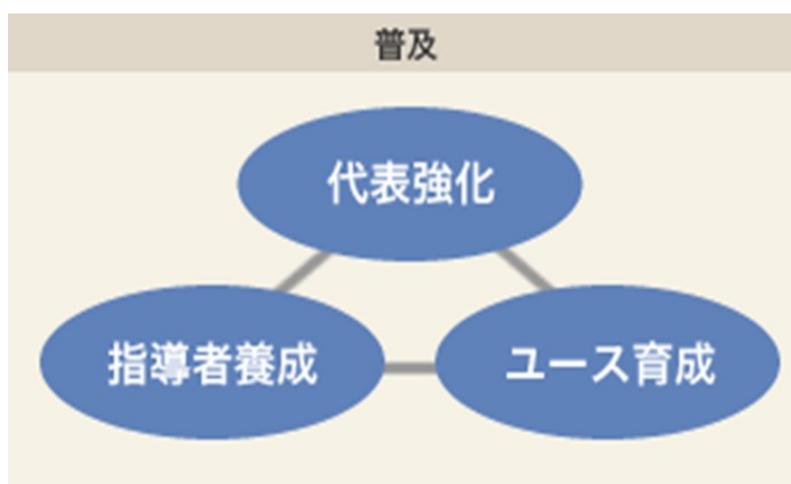


図25 三位一体の政策

出所：日本サッカー協会「選手育成のコンセプト」

[https://www.jfa.jp/youth\\_development/outline/](https://www.jfa.jp/youth_development/outline/)

## 2. JFA の宣言と目標

JFA は「JFA2005 年宣言」を公表した<sup>50)</sup>。その項目の 1 つに「JFA の約束 2015」があり、内容は図 26 の通りである<sup>50)</sup>。2 つある約束のうち 1 つ目の「2015 年までにサッカーファミリーが 500 万人になる」という目標は 2015 年にはサッカーファミリーが 526 万になった<sup>49)</sup>という報告がされたため、この目標は達成された。しかし、もう 1 つの目標である「日本代表チームは、世界でトップ 10 のチームとなる」は 2015 年時点で日本代表の FIFA ランキングは 53 位とトップ 10 からほど遠い数字となった。また、「JFA2005 年宣言」では「JFA の約束 2050」記載されており、内容は図 27 の通りである<sup>50)</sup>。加えて、「JFA の約束 2050」の具現に向けて JFA は 2030 年までに達成すべき新たな目標である「JFA の目標 2030」を設定し、内容は図 28 の通りである<sup>51)</sup>。

### **JFAの約束2015**

1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが500万人になる。
2. 日本代表チームは、世界でトップ10のチームとなる。

図 26 JFA の約束 2015

### **JFAの約束2050**

1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが1000万人になる。
2. FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームは、その大会で優勝チームとなる。

図 27 JFA の約束 2050

## **JFAの目標2030**

1. 2030年までに、サッカーファミリーが800万人になる。
2. 日本代表チームは、FIFAワールドカップに出場し続け、2030年までに、ベスト4に入る。

図 28 JFA の目標 2030

このように、JFA は目標を年代毎に定めているが、「JFA の約束 2015」における 2 つ目の目標の「日本代表チームは、世界でトップ 10 のチームになる」を達成することができなかつたため、次の目標である「JFA の目標 2030」を経て、最終的には「JFA の約束 2050」を果たしたいと望んでいる。日本代表は 1998 年にフランスで開催された FIFA ワールドカップに初出場を果たしてから 2022 年のカタール大会まで 7 大会連続で出場を決めている。そのため、アジアの中では強豪国として見なされているが、W 杯においてベスト 16 の壁をなかなか超えられずにいる。そのため、現状のままでは約束を果たすことができる可能性は決して高いとは言えないことから、日本サッカーの課題点を洗い出して修正することが必要不可欠である。

## 第 2 節 日本サッカーの課題点

日本サッカー界の課題点として挙げられるのは、「判断能力」であると考えられる。2002年に日本と韓国の共同開催となったW杯におけるJFAテクニカルレポート（2002）においては、「時間とスペースがますます制限される中で、選手個々がそれぞれの状況に応じて、いくつかの選択肢の中から最適なプレーを選択するために、常に状況を観ることが必要である<sup>53)</sup>」という課題が明記されている。また、2013年にブラジルで開催されたFIFAコンフェデレーションズカップのJFAテクニカルレポート（2014）においては、「攻撃では、積極的にゴールに向かうべきか、ボールを失わないプレーを選択すべきかの判断を常に持ってプレーすることが必要である<sup>52)</sup>」と報告されている。加えて、2006年に開催されたW杯において、日本代表の主将として活躍した宮本恒靖氏（2013）も日本サッカーがさらに飛躍するには判断能力の向上が必要と述べている<sup>21)</sup>。そして、現役時代は主にレアル・マドリードで活躍し、後にスペイン代表の監督も務めたフェルナンド・イエロ氏（2019）も日本でサッカーを指導した際、日本人には状況の変化に対応する判断力と決断力が足りないと述べていた<sup>29)</sup>。

このように、日本サッカー界は日韓W杯の頃から「判断能力」が課題点として挙げられていたが、約20年経過した現在においても課題点として残っている。加えて、日本人のみならず海外出身の方から俯瞰してみても、日本サッカーには「判断能力」が不足していると思われている。

### 第3節 具体的な提言

#### 1. バイオ・バンディング

日本サッカー界の課題である「判断能力」を改善するために最初に提言したいのが、ベルギーにおいて取り組まれている「バイオ・バンディング」という育成法である。

日本人は世界の中でも早熟傾向で諸外国と比較しても約2年早いことが判明し、日本人男性の身長が最も伸びる平均年齢は13歳である<sup>18)</sup>。したがって、日本人は中学生の頃に諸外国は高校生の頃にそれぞれ身体の成長のピークを迎えることになる。必ずしも日本人全員が13歳頃に成長のピークが訪れるわけではなく、早熟型や晩成型の成長速度である人々も存在する。そのため、成長速度には個人差があり、日本におけるユース年代の指導においては、プレイヤー間における身体的なフィジカルの差が生じやすいことを考慮したアプローチをすべきであると考えられる。実際に、これまで日本サッカー界を牽引してきた中村俊輔選手は身体が小さかったことと足が遅かったことが理由でユースに選抜されなかった<sup>17)</sup>。このように、日本サッカーの現状は体格・身体能力が優先されたセレクションでタレント発掘・育成が行われている<sup>66)</sup>。そのため、将来プロで活躍することができる能力を秘めているのにも関わらず、現状の体格や身体能力を判断材料として指導していることが多い。また、この年代のプレイヤーは身長の急激な伸びが見られることから、モタモタとした鈍い動きを見せたり、これまでできていた運動が上手くできなくなることがある<sup>54)</sup>。そのため、身体にアンバランスをもたらし、「クラムジー」と呼ばれる、新たなテクニックを習得するには不

利な時期にも差しかかる。そこで、提案できるのが「バイオ・バンディング」という育成法である。バイオ・バンディングは従来の実年齢ではなく、生物学的年齢でグルーピングするため、プレイヤー間の身体的なフィジカルの差をなくすことが可能である。そのため、フィジカルだけで勝負が決まることがなく、フィジカル以外の要素が勝負を決める要因となる。そして、先程も述べたが、中学生年代は「クラムジー」の現象により新たなテクニックを習得することが困難であるため、ボールを扱わない「持久力」や「判断力」を向上させる絶好の機会である。したがって、「バイオ・バンディング」に取り組むことで、身体的な成長速度の差が激しい中学生年代に対する指導においても、フィジカルの差をなくしながら日本サッカーの課題である「判断力」を向上させることができる。

## 2. ゲーム形式を中心とした練習

次の提案は、「ゲーム形式を中心とした練習」という案である。日本においてはいわゆるドリル形式の練習が重宝されており、トレーニングセッションの中でゲーム形式の練習は最後に行われることが多い。日本でサッカー指導の経験があるランデル・エルナンデス・シマル氏（2012）は日本人について「技術ベースは非常に高い」と述べている<sup>31)</sup>ことから、ドリル形式の練習は良い影響をもたらしている。しかし、同氏は「日本人は学ぶ意欲があり規律正しいが、言われたことをしてしまう」と話しており<sup>31)</sup>、これは決まったことを反復し続けるドリル形式の練習ばかりを実践している弊害であると考えられる。実際、サッカーの試合中においては認知・判断・実行のプロセスを瞬時に回している。しかし、日本のサッカーのトレーニングにおいてはこのプロセスの「実行」の部分に重きを置いており、「実行」に至るまでの「認知」と「判断」を重要視している風潮はあまり見受けられない。ドリル形式の練習はディフェンダーがいらないため、自分の思い通りの動きやコントロールをすることができるが、実際の試合では相手チームからのプレッシャーを受けながらプレーするため、ドリル形式の練習のような動きやコントロールができる場面は少ない。スペインでは「サッカー＝戦術＝駆け引き」という解釈が存在し、テクニックはその「駆け引き」をするための「道具」でしかないが、日本では、テクニックが「道具」ではなくトレーニングの「主目的」と化している<sup>43)</sup>と言える。そこで、提案したいのが、「ゲーム形式の練習を中心とする」という案である。ゲーム形式の練習は実際の試合を想定してゲームを行うことがで

きるため、認知・判断・実行のプロセスを回すことができる点がドリル形式の練習と異なる点である。ドリル形式の練習では相手チームのプレッシャーを受けないため、認知して判断するというプロセスを回さない。しかし、実際の試合では相手チームからのプレッシャーを強く受けるため、1つ1つの場面を瞬時に認知して判断するというプロセスを回すことができる。そのため、日本サッカーの課題である「判断力」を改善するには非常に適している。

表 16 は日本代表 U13～U16 の週間トレーニングのスケジュールであり、トレーニングの構成比を示した表である<sup>26)</sup>。表 16 を見て分かるように、ゲーム形式トレーニングであるチーム TR は火曜から金曜の 4 日間全て 1 日のトレーニングの 6 分の 1 しか構成されていない。一方、ドリル形式の練習である個人戦術が 4 日間全て 1 日の 6 分の 2 を構成されており、ゲーム形式のトレーニングよりも多くの時間を割いている。このことから、現状ゲーム形式のトレーニングがほとんど実践されていないため、ベルギーのようにトレーニングセッションにおけるゲーム形式の練習の割合をさらに増加させることは必要であると考えられる。

表 16 U13～U16 の週間トレーニングと  
そのトレーニング構成比

月	火	水	木	金
OFF	チームTR1/6	チームTR1/6	チームTR1/6	チームTR1/6
	グループTR2/6	グループTR2/6	グループTR2/6	グループTR2/6
	個人戦術2/6	個人戦術2/6	個人戦術2/6	個人戦術2/6
	コアTR1/6	11+1/6	コアTR1/6	11+1/6

#### IV. 結論

本研究はベルギーの指導者養成に関する研究を行い、選手の個性を磨き続けるサッカー指導法の実態を明らかにすることを目的とし、加えて、研究結果を踏まえた上で今後の日本サッカーへの提言を検討した。

ベルギーにおいてはベルギーサッカー協会(RBFA)主導の育成プログラムに基づき、Belgium Football DNAを指導者に教え込んで指導者養成に取り組んでいた。このプロジェクトは「The Belgian Way」と呼ばれ、以前とは異なるコーチングメソッドを採用することで選手の将来を見据えたサッカーコーチング指導を実践していることが判明した。そして、選手の個性を磨き続ける具体的な指導法は、直接的な方法が2つ、間接的な方法が2つ実施されていることがわかった。直接的な方法1つ目はバイオ・バンディングと呼ばれる育成法、2つ目はゲーム形式を中心とした練習、この2つである。一方、間接的な方法1つ目は、自国で育成した後は可能な限り若い年齢のうちから自国リーグよりもレベルの高い国外クラブに移籍させることで、よりレベルアップを促す、2つ目は7~9歳の年代への指導を重要視することで、この年代からの普及に伴い、1人でも多く将来有望なサッカープレイヤーを発掘する、この2つである。

選手の個性を磨き続ける直接的な指導法は、主役である選手を取り囲む「環境」を重要視していると結論づける。選手1人たりとも見逃さないために、ユース世代特有の身体的な成長を考慮したり、サッカーにおいて非常に重要となる認知・判断・実行のプロセスを回す能力を向上させるためにリアリティのある環

境を整備したりと、選手を取り囲む「環境」を整えることに重きを置いている。

また、間接的な指導法においては、ベルギーは国としての規模や歴史的背景を踏まえた上で、自国だけの力ではなく隣国の力も上手く利用したり、6~7歳を指導するためのスペシャリストコースを組んで小学生年代からの普及を重要視することで、将来を見据えた選手育成に取り組んでいる。これは他国にはないベルギー独自の取り組みであり、国としての規模が小さいからこそ国全体に浸透させることができ、国家単位でサッカー界を盛り上げることに成功したと言える。

そして、日本サッカーは「判断力」が約20年前からの改善点であるため、ベルギーにおいても実践されているバイオ・バンディングの育成法やゲーム形式を中心とした練習を提案する。ユース世代の選手たちは身体的な成長が著しく、フィジカルの差が大きく生じやすい。また、サッカーは認知・判断・実行のプロセスを回す能力が重要となるが、日本においてはドリル形式の練習が重宝されやすい風潮があるため、「実行」の部分に時間をかけることが多い。したがって、フィジカルの同等なグループ分けを施すバイオ・バンディングの育成法や、実際の試合と同等なリアリティのある環境で認知・判断・実行のプロセスを鍛えることができるゲーム形式を中心とした練習に取り組むことで、日本サッカーの課題である「判断力」を改善することができると考えられる。

## V. 研究の限界

本研究における限界点は2点ある。

1点目は、実際に私自身の耳で直接お話を聞くことやインタビューを行わなかった点である。今回は、コロナウイルスの蔓延の影響によってインターネット上で公開されていたウェビナー動画の視聴を研究方法として採用した。このウェビナー動画でプレゼンテーションしていたクリス氏はグラスルーツのコーチとしての経験が15年間ほどあり、育成の現場に直接携わっていたため、研究内容としての信憑性は高いと考えられる。しかし、現在のベルギーサッカー協会の関係者、選手やコーチなどに直接インタビューを行わなかった。したがって、直接インタビューを行うことで単にお話を聞くだけでなく、その場で私が感じた点や疑問に思った点を相手に投げかけてより詳細に情報を入手することが課題である。

2点目は、ベルギーサッカー協会やコーチからの観点の研究内容であった点である。ベルギーの躍進にはベルギーサッカー協会の力が非常に大きかったため、本研究では協会や協会から指導法を委託されたコーチからの観点の研究内容で構成されている。そのため、より内容の濃い研究結果にするために、主役である選手自身の意見や想いを本研究に反映させることが今後の課題であると考えられる。

## VI. 参考文献

1) Abernethy, B., Thomas, K.T. and Thomas, J.T (1993) . Strategies for improving understanding of motor expertise (or mistakes we have made and things we have learned!!). Amsterdam: El-sevier, pp.317 – 356.

2) 足立真俊 (2019) . ドイツの育成改革者が説く「認知」を鍛える新アプローチ. footballista.

<https://www.footballista.jp/special/76080> (参照日 2023 年 1 月 3 日)

3) 浅野賀一 (2018) , 村井チェアマンが語る育成の可視化.『フットパス』で見えた J の現在地. footballista.

<https://www.footballista.jp/special/43046> (参照日 2022 年 12 月 26 日)

4) Andrew Beaton (2018) . ベルギー代表, サッカー王国を築いた教授. THE WALL STREET JOURNAL.

<https://jp.wsj.com/articles/SB11756459905445293977504584337453740079512> (参照日 2022 年 12 月 21 日)

5) Baxter-Jones ADG, Thompson AM, and Malina RM (2002) . Growth and maturation in elite young female athletes. Sports Med Arth Rev 10: 42–49,

6) Bob B (2014) . Belgium Youth Development. SlideShare.

<https://www.slideshare.net/PedMenCoach/belgium-youth-development> (参照日 2022 年 12 月 27 日)

7) Buchheit, M., & Mendez-Villanueva, A (2014) . Effects of age, maturity and body dimensions on match running performance in highly trained under-15 soccer players. Journal of Sports Sciences,

32(13), 1271–1278.

8) Cynthia J. Stein & Lyle J. Micheli (2010). Overuse Injuries in Youth Sports, *The Physician and Sportsmedicine*, 38:2, 102-108.

9) DiFiori JP, Benjamin, HJ, Brenner, JS, Gregory, A, Jayanthi, N, Landry, GL, Luke, A (2014) . Overuse injuries and burnout in youth sports: a position statement from the American Medical Society for Sports Medicine. *Br J Sports Med*;48:287–288.

10) Dublin GAA Coaching & Games Development (2021) . DGAA Coach Webinar Series II Coaching Switch with Kris Van Der Haegen. YouTube.

[https://www.youtube.com/watch?v=rsp-\\_pzxccE&list=LL&index=8](https://www.youtube.com/watch?v=rsp-_pzxccE&list=LL&index=8)

(参照日 2022 年 12 月 27 日)

11) Figueiredo, AJ, Silva, Me, Cumming, SP, & Malina, RM (2010) . ‘Size and Maturity Mismatch in Youth Soccer Players 11- to 14-Years-Old’, *Pediatric Exercise Science*, vol. 22, no. 4, pp. 596-612.

12) FIFA (online) . Men`s Ranking Procedures,

<https://digitalhub.fifa.com/m/f99da4f73212220/original/edbm045h0u dbwkqew35a-pdf.pdf> (参照日 2022 年 12 月 27 日)

13) FIFA (online) . More than half the world watched record-breaking 2018 World Cup,

<https://www.fifa.com/tournaments/mens/worldcup/2018russia/media-releases/more-than-half-the-world-watched-record-breaking-2018-world-cup> (参照日 2022 年 12 月 27 日)

14) GAALearning (2020) , National Games Development Conference 2020 - Kris Van Der Hagen - The Coaching Switch. YouTube.

<https://www.youtube.com/watch?v=PXQEfVVG9bU&list=LL&index=4> (参照日 2022 年 12 月 26 日)

15) 平田竹男 (2017) . 『スポーツビジネス最強の教科書 (第 2 版)』東洋経済新報社.

16) hirobrown (2015) . 赤い悪魔ベルギーを FIFA ランク 1 位に導いた育成論. SOCCERKING.

[https://www.soccerking.jp/news/world/world\\_other/20151110/368663.html](https://www.soccerking.jp/news/world/world_other/20151110/368663.html) (参照日 2023 年 1 月 4 日)

17) 北条正士 (2000) . 『中村俊輔 - 世界へはなつシュート』旺文社.

18) 星川精豪 (2020) . 「成長期に合わせたトレーニングの実践」, 日本バスケットボール協会.

[http://www.japanbasketball.jp/files/coach/contents/01/JBASP\\_LS\\_200811\\_10\\_1.pdf](http://www.japanbasketball.jp/files/coach/contents/01/JBASP_LS_200811_10_1.pdf) (参照日 2023 年 1 月 3 日)

19) ICOACHKIDS WORLD (2021) . DAY 2 SESSION 9 COACHING THE GREEN BANANAS THE FUTURE STARS PROGRAMME, YouTube.

<https://www.youtube.com/watch?v=7XVbQBNKOzc&list=LL&index=2&t=1s> (参照日 2022 年 12 月 22 日)

20) ICOACHKIDS WORLD (2020) . iCoachKids Shares#1-The Future of Football. YouTube.

<https://www.youtube.com/watch?v=M7t210caHt4&list=LL&index=7> (参照日 2022 年 12 月 22 日)

21) 飯尾篤史 (2013) . 宮本恒靖「日本サッカーが次の段階に行くためにはセオリーを押さえ,判断力と決断力が必要」.

SOCCKERKING.

[https://www.soccer-king.jp/sk\\_column/article/151532.html](https://www.soccer-king.jp/sk_column/article/151532.html)

(参照日 2022 年 12 月 23 日)

22) INSIDE THE ACADEMY (2020) . Belgium player development pathway with Kris Van Der Haegen, YouTube.

[https://www.youtube.com/watch?v=bL\\_YHe774fA&list=LL&index=3](https://www.youtube.com/watch?v=bL_YHe774fA&list=LL&index=3)

(参照日 2022 年 12 月 22 日)

23) 金子憲一 (2010) . 「スペインサッカーの育成方法から学ぶ日本の現状と課題」, Strength & conditioning journal : 日本ストレングス&コンディショニング協会機関誌 17(7) (通号 153) p.2～11.

24) 川端 暁彦 (2016) . 日本サッカー界の育成にメス！...欧州式の育成評価システムが“黒船”になる！？. SOCCKERKING.

<https://www.soccer-king.jp/news/japan/jl/20160519/444493.html>

(参照日 2023 年 1 月 3 日)

25) 川端 暁彦 (2017) . Jクラブのアカデミーを世界基準で査定すると？ 育成評価システム「フットパス」が指摘した"日本的"組織の問題. Coachunited.

<https://coachunited.jp/column/000671.html#> (参照日 2022 年 12 月 23 日)

26) kepios (2021) . DIGITAL 2021: FRANCE.

<https://datareportal.com/reports/digital-2021-france> (参照日 2022 年 12 月 28 日)

27) Khamis, H. J., & Roche, A. F. (1994). Predicting adult height without using skeletal age: The Khamis-Roche method. Pediatrics, 94,

504–507 (Pediatrics, 595, 457, 1995 for the corrected version of the tables).

28) Khamis, H.J., & Roche, A.F. (1994). Predicting adult stature without using skeletal age: The Khamis-Roche method. *Pediatrics*, 94(4 Pt 1), 504-507.

29) 栗田シメイ (2019) . レアル OB のイエロが思う日本の課題. 「積極的なミスを褒めよう」 . Sportive.

[https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/wfootball/2019/02/06/ob/index\\_2.php](https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/wfootball/2019/02/06/ob/index_2.php) (参照日 2022 年 12 月 23 日)

30) ランデル・エルナンデス・シマル：倉本和昌 訳 (2009) . ジュニア世代の考えるサッカー・トレーニング：シャビもセスクも学んだ：「スペイン流」でサッカー脳を鍛えろ！：Soccer clinic+α, ベースボール・マガジン社 (B.B.mook ; 641. スポーツシリーズ ; no.513).

31) ランデル・エルナンデス・シマル：倉本和昌 訳 (2012) . ジュニア年代の考えるサッカー・トレーニング：Soccer clinic+α 2(実践編) シャビとイニエスタを育てた：「スペイン流」12 章でサッカー脳を活性化!, ベースボール・マガジン社.

32) ランデル・エルナンデス・シマル：倉本和昌 訳(2012)スペイン流サッカーライセンス講座：『育成大国』の指導者が明かす考えるトレーニング理論：シャビ,イニエスタ,シャビ・アロンソ... 彼らを育てたスペイン流の指導術とは?. ベースボール・マガジン社.

33) Lloyd RS, Oliver JL, Faigenbaum AD, Myer GD, and De Ste Croix MBA (2014) . Chronological age vs. biological maturation:

Implications for exercise programming in youth. *J Strength Cond Res* 28: 1454–1464.

34) Lloyd RS and Oliver JL (2012) . The youth physical development model: A new approach to long-term athletic development. *Strength Cond J* 34: 61–72.

35) Malina RM, Rogol AD, Cumming SP, Coelho e Silva MJ, Figueiredo AJ(2015). Biological maturation of youth athletes: assessment and implications *Br J Sports Med* 2015;49:852-859.

36) Mann DL and van Ginneken PJ (2017) . Age-ordered shirt numbering reduces the selection bias associated with the relative age effect. *J Sports Sci* 35: 784–790.

37) 松原英輝 (2009) . フランスのサッカー選手育成の現状について. 大阪教育大学紀要第 IV 部門第, 57(2), 241-258.

38) 松原英輝 (2011) . フランスのサッカー選手育成の現状について:-育成年代における技術, 戦術指導の現状と特徴. *コーチング学研究*, 25(1), 67-76.

39) 松原英輝, 入口豊, 中野尊志, 西田裕之, & 中村泰介 (2006) . フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究 (1) 若年層における選手育成システムの現状と特徴. 大阪教育大学紀要 4 教育科学, 55(1), 51-70.

40) 松原英輝, 入口豊, 中野尊志, 西田裕之, & 中村泰介 (2007) . フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究 (2) 国立サッカー学院 (INF) の現状及び特徴. 大阪教育大学紀要 4 教育科学, 55(2), 27-44.

41) Meylan, C., Cronin, J., Oliver, J., & Hughes, M. (2010). Talent

identification in soccer: The role of maturity status on physical, physiological and technical characteristics. *International Journal of Sports Science & Coaching*, 5 (4), 571-592.

42) Mirwald RL, Baxter-Jones ADG, Bailey DA, and Beunen GP (2002). An assessment of maturity from anthropometric measurements. *Med Sci Sports Exerc* 34: 689-694.

43) 村松尚登, 小澤一郎 (2013). 「日本はバルサを超えられるか: 真のサッカー大国に向けて『育成』が果たすべき役割とは」, 河出書房新社.

44) 内藤翔平, 入口豊, 井上功一, 中野尊志, & 大西史晃 (2013). イングランドのサッカークラブにおけるユース育成について (1) イングランドのユース育成システム. *大阪教育大学紀要 第 IV 部門 教育科学*, 61(2), 11-24.

45) 中野吉之伴 (2016). 世界王者ドイツの育成メソッドに学ぶサッカー年代別トレーニングの教科書, 株式会社カンゼン.

46) 中田徹 (2014). W杯ベスト4へ 自信みなぎるベルギー 育成強化で作りに上げた「楽しい」サッカー. *Sportsnavi*.

<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201406170003-spnavi?p=2>

(参照日 2022 年 12 月 23 日)

47) 夏原隆之, 中山雅雄, 加藤貴昭, 永野智久, 吉田拓矢, 佐々木亮太, & 浅井武 (2015). サッカーにおける戦術的判断を伴うパスの遂行を支える認知プロセス. *体育学研究*, 60(1), 71-85.

48) 日本経済新聞 (2015). 「ベルギー, サッカー「世界 1 位」へ育成成功で躍進」. 10 月 29 日. 朝刊. 電子版.

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO93296390X21C15A000000>

0/ (参照日 2022 年 12 月 27 日)

49) 日本サッカー協会 (online) . 『データボックス』

[http://www.jfa.jp/about\\_jfa/organization/databox/](http://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/) (参照日 2022 年 12 月 26 日)

50) 日本サッカー協会 (online) . 「JFA の目標」

[https://www.jfa.jp/about\\_jfa/dream/](https://www.jfa.jp/about_jfa/dream/) (参照日 2022 年 12 月 27 日)

51) 日本サッカー協会 (online) . 「JFA の目標 2030」

[https://www.jfa.jp/about\\_jfa/plan/goal2030.html](https://www.jfa.jp/about_jfa/plan/goal2030.html) (参照日 2022 年 12 月 26 日)

52) 日本サッカー協会 (2014) . 『JFA テクニカルレポート 2013』 . 日本サッカー協会 .

53) 日本サッカー協会 (2002) . 『2002 FIFA World Cup Korea/JapanTM JFA テクニカルレポート』 . 日本サッカー協会 .

54) 日本サッカー協会 (2017) , JFA 指導指針 2017, 日本サッカー協会 .

55) 日本サッカー協会 (online) . 「選手育成のコンセプト」

[http://www.jfa.jp/youth\\_development/outline/](http://www.jfa.jp/youth_development/outline/) (参照日 2022 年 12 月 29 日)

56) 日刊スポーツ (2018) . 「育てて売る好循環でベルギーが強さ確立」 . 6 月 28 日 . 電子版 .

<https://www.nikkansports.com/soccer/russia2018/news/201806260000614.html> (参照日 2022 年 12 月 28 日)

57) 西部謙司 (2022) . フットボール代表プレースタイル図鑑, 株式会社カンゼン .

58) 小川由紀子 (2017) . 九州の 3/4 の小国ベルギーが FIFA ラン

キング 1 位になれた理由, footballista.

<https://www.footballista.jp/special/39582> (参照日 2022 年 12 月 28 日)

59) Pierre, F., Sam, S (2019) . Socio-economic impact study of the Pro League on the Belgian economy. Deloitte

[https://www2.deloitte.com/content/dam/Deloitte/be/Documents/technology-media-telecommunications/pro-league-2021\\_deloitte-be\\_report\\_en.pdf](https://www2.deloitte.com/content/dam/Deloitte/be/Documents/technology-media-telecommunications/pro-league-2021_deloitte-be_report_en.pdf) (参照日 2022 年 12 月 28 日)

60) Pierre, F., Sam, S (2021) . Socio-economic impact study of the Pro League on the Belgian economy. Deloitte

[https://www2.deloitte.com/content/dam/Deloitte/be/Documents/technology-media-telecommunications/pro-league-2021\\_deloitte-be\\_report\\_en.pdf](https://www2.deloitte.com/content/dam/Deloitte/be/Documents/technology-media-telecommunications/pro-league-2021_deloitte-be_report_en.pdf) (参照日 2022 年 12 月 28 日)

61) Pierre, F., Sam, S (2022) . Socio-economic impact study of the Pro League on the Belgian economy. Deloitte

<https://www.proleague.be/dato/25478/1658231976-pro-league-report-en.pdf> (参照日 2022 年 12 月 28 日)

62) Sean P. Cumming, Daniel J. Brown, Siobhan Mitchell, James Bunce, Dan Hunt, Chris Hedges, Gregory Crane, Aleks Gross, Sam Scott, Ed Franklin, Dave Breakspear, Luke Dennison, Paul White, Andrew Cain, Joey C. Eisenmann & Robert M. Malina (2017). Premier League academy soccer players' experiences of competing in a tournament bio-banded for biological maturation, Journal of Sports Sciences.

63) 総務省 (2022) . ベルギー王国 (Kingdom of Belgium) 基礎デ

ータ.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/belgium/data.html#section1>

(参照日 2022 年 12 月 22 日)

64) Statista Research Department (2014) . National teams at the 2014 FIFA World Cup in Brazil by average age of players(in years), Statista

[https://www.statista.com/statistics/303661/fifa-world-cup-2014-](https://www.statista.com/statistics/303661/fifa-world-cup-2014-brazil-teams-by-average-player-age/)

[brazil-teams-by-average-player-age/](https://www.statista.com/statistics/303661/fifa-world-cup-2014-brazil-teams-by-average-player-age/) (参照日 2022 年 12 月 27 日)

65) 須田, 芳正, 岩崎, & 陸, 松山 (2019) . サッカーのユース選手育成についての研究: オランダサッカーの育成システムに関する一考察. 体育研究所紀要, 58(1), 1-8.

66) 竹内 傑・渡邊將司・高井省三 (2009). 「ジュニアサッカーチームのエリート選手はどのように選抜されたか」. 『トレーニング科学』 21 (3), 289-296.

67) The Kick Algorithms (2022) . Leagues Global Rating.

[https://www.kickalgor.com/football-leagues/the-ka-football-leagues-global-rating-for-2022-23-season/the-ka-football-leagues-global-](https://www.kickalgor.com/football-leagues/the-ka-football-leagues-global-rating-for-2022-23-season/the-ka-football-leagues-global-rating-for-2022-23-start-season-data-table/)

[rating-for-2022-23-start-season-data-table/](https://www.kickalgor.com/football-leagues/the-ka-football-leagues-global-rating-for-2022-23-start-season-data-table/) (参照日 2022 年 12 月 27 日)

68) 土屋慶太 (2015) . ドイツ流サッカーライセンス講座 『世界王者』が明かす実践的トレーニング理論, ベースボールマガジン社.

69) Vaeyens, R., Lenoir, M., Williams, M., Mazyn, L., and Philippaerts, R. M(2007). The effects of task constraints on visual search behavior and decision making skill in youth soccer players. *J. Sport Exerc. Psychol.*, 29(2): 147-169.

70) 結城康平 (2017) . ベルギーサッカーに学ぶ,怪物育成術.なぜ次々とワールドクラスが生まれるのか. VICTORY.

<https://victorysportsnews.com/articles/5679/original> (参照日 2022 年 12 月 29 日)

71) 結城康平 (2018) . 「技術」を伴う「判断」——欧州の育成トレンドは日本の課題, footballista.

<https://www.footballista.jp/special/48666> (参照日 2022 年 12 月 29 日)

72) 結城康平 (2019) . 「バイオバンディングとは？」育成における年齢の新たな枠組み. footballista.

<https://www.footballista.jp/special/75215> (参照日 2022 年 12 月 27 日)

73) 結城康平 (2022) . 「晩成型」の選手を見逃さないために. バイオ・バンディングを意識したトレーニングの構築, footballista.

<https://www.footballista.jp/special/137168> (参照日 2022 年 12 月 26 日)

## 付録

### 大会の概要

#### FIFA ワールドカップ (W 杯)

本大会は国際サッカー連盟 (FIFA) が主催するサッカー界の中で世界最高峰の大会である。4 年に 1 度開催され、ナショナルチームによる世界選手権であるため、大会中は非常に多くの観客動員数やテレビによる視聴者数が見込まれる。2018 年にロシアで開催された W 杯における世界の総視聴者数は 35 億 7200 万人であったと FIFA が報告している<sup>13)</sup>。これは世界人口の約半分の人々が視聴していることから、いかに W 杯が世界中で注目されているかが伺える。

#### UEFA 欧州選手権

欧州サッカー連盟 (UEFA) が主催するヨーロッパで No.1 を決める大会である。W 杯と同様に 4 年に 1 度開催され、W 杯と同等の重要性や盛り上がりを見せる。UEFA にはサッカー強豪国が多数加盟しているだけでなく、出場国が 24 カ国と W 杯よりも少数であるため、W 杯と同等かそれ以上のレベルの高さを誇る。そのため、大陸別選手権であるが、ヨーロッパだけではなく世界中から注目が集まる。

## 謝辞

本研究を執筆するにあたり、指導教授である倉石平教授には  
厳しい御指導をしていただき、様々な助言や教えを賜りました  
ことに心より御礼申し上げます。コーチングに加えてスポーツ  
ビジネスなど多角的な視点でボールゲームに対する理解を深め  
ることができました。大変ありがとうございました。

また、副査である堀野博幸先生、松井泰二先生に心より御礼申  
し上げます。堀野先生には私の専門競技と同じサッカーに関す  
る助言を多くいただき、サッカーに対する教養や知識を身につ  
けることができました。松井先生にも本研究に関するご相談を  
受けていただき、ありがとうございました。そして、同じ倉石研  
究室に所属する学生の方々にもご協力をしていただき、ありが  
うございました。

最後に、あらゆる面から私の大学院生活を支えてくれた家族  
に深く感謝申し上げます。

森田省吾